

蘆花浅水荘

滋賀県大津市

ろかせんすいそう

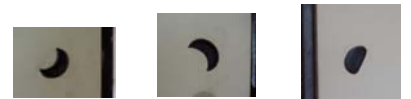


書院から望む庭園

この別荘庭園は、山元春挙が故郷 膳所に、自分の画の師 森寛齋と両親の恩を記す持仏堂を建立するとともに、自身のアトリエを造るために建築したものであり、離れ、土蔵、持仏堂、本屋など六棟の建造物が存在する。邸宅となる本屋は、数寄屋造りを基調とし茶室を点在させ、春挙の意図によりそれぞれ異なった意匠でまとめられている。1階は住居、2階は応接間とアトリエからなる。屋根は寄棟造、檜皮葺である。



【残月の間】天井と障子の腰板に網代を施している。残月の間の襖の引き手は正に残月を表す。書院の引き手は満月、続く仏間は半月、と、月の満ち欠けを引き手で表現している。



見どころ

蘆花浅水荘（ろかせんすいそう）は、日本画家山元春挙（やまもとしゅんきょ）の別荘で、春挙自らが設計・監修を手掛け、京都の大工 橋本嘉三郎と共に7年の歳月をかけて建築した邸宅である。画家であり、山を愛する登山家であり、書や詩にも精通する粹人春挙がその洗練された感性をもって建築した蘆花浅水荘は、意匠的、技術的に趣向が凝らされているが、華美でなく計算された機能美と気品さえ感じられる。また、庭園は琵琶湖及び近江富士と称される三上山を借景し、数寄屋建築の粋を存分に堪能できる。

【2階応接室】山元家の家紋である「ききょう」が家具、天井換気口、シャンデリアにあしらわれている。



【竹の間】床の間の室礼も全て竹という徹底ぶり。襖には春挙松が描かれ、引き手は竹製で雀が飛び立つ様子を表現。丸窓には竹を嵌めこみ障子越しに満月とススキを表現する粋な趣向。



大正時代の雰囲気漂う、静かで落ち着いた魅力的な和の空間。

近代建築の違例として国の重要文化財に指定された蘆花浅水荘は地域の人々にその価値を理解され、コミュニティの場としても大いに活用されている。

【莎香亭】松の唐紙に千鳥の引き手。楽しく舞う様子を高さを変えて表現する粋な遊び心。春挙が瞑想に耽った小部屋には梅が描かれている。



庭園から見た邸宅

建物名称	蘆花浅水荘
建築年	1914年～1921年（大正3年～10年）
構造・様式	木造2階建て・数寄屋造
所在地	大津市中庄1丁目19番地23号
電話	077-522-2183
H P	www.001.upp.so-net.ne.jp/rokasensuisou/top.htm
開館時間	10:00～16:00（要予約）
アクセス	京阪電車石山坂本線瓦ヶ浜下車 徒歩5分
備考	国の重要文化財 大津市指定文化財 名勝

居初氏庭園と天然図画亭

滋賀県大津市

いそめしていえんとてんねんずえてい



居初氏庭園と天然図画亭

居初氏庭園と天然図画亭は、天和元年（1681年）頃に、千利休の孫にあたる千宗旦の門人、藤村庸軒（ふじむらようけん）と、庸軒の門人で堅田郷士の一人である北村幽安（きたむらゆうあん）との合作により作庭されたと伝えられている。

【居初氏庭園（いそめしていえん）】

広さは208坪。門を入ると霰敷を矩形に打ち、直線を強調した敷石が湖岸壁まで続く。その先には、サツキの大刈込が琵琶湖を背景に迎えてくれる。茶室の縁先へ導くように途中から直角に右に曲がる霰敷石。先には、袈裟型手水鉢が鎮座する。全庭を覆う杉苔、形よく手入れされた松やツツジ、飛石、置き石の配置が絶妙であり、東面に広がる雄大な琵琶湖と湖東の山々を借景する庭園は滋賀ならではの天然図画である。

琵琶湖の青、ツツジの紅、松の緑といったコントラストが庭園美を一層引き立てる。



縁先の手水鉢



見どころ

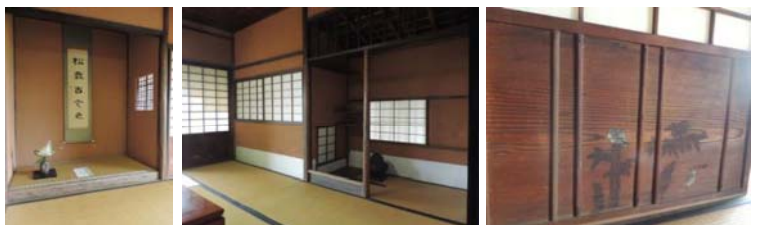
琵琶湖の湖上特権を掌握し、堅田の三豪族として代々大庄屋を勤めてきた居初家。その屋敷内に広がる居初氏庭園。琵琶湖や対岸の近江富士と称される三上山を借景とする枯山水庭園は、国指定の名勝である。その庭園内に建てられた茶室が、天然図画亭（てんねんずえてい）である。その茶室から望む庭園の光景は、茶室の陰と相まって自然の美しさがさらに際立ち嘆息する。まさに、天然図画である。心静かに四季折々の繊細な美しさを堪能できる魅力的な和の空間である。茶室は県指定重要文化財であり、茶室越しに庭園を眺めるための工夫が随所に見られる。

【天然図画亭（てんねんずえてい）】

天然図画亭の名は天台の学僧 六如上人（りくによしょうにん）が名付けたとされている。葭葦入母屋造、柿葺庇、平入り。玄関3畳、中の間4畳半（本勝手の茶室）、これに続く仏間6畳、主室は8畳と1畳の点前畳。玄関と主室には腰高障子を入れており、腰板には、海北友松（かいほうゆうしょう）作と伝わる花鳥が描かれている。点前座は向切、逆勝手で、中央に中柱を立て結界を作り遊具を客人に見せびらかさない謙虚な気持ちを表している。また、縁先には、秀吉の御座船にヒントを得た板葺の仕掛けや、出庇、腰高障子は、茶室越しに眺める庭園を図画のように見せるための演出である。



茶室越しに眺める庭園



廻り縁のある天然図画亭

建物名称	居初氏庭園と天然図画亭
建築年	1681年（天和元年）
構造・様式	葭葦入母屋造
所在地	大津市堅田2丁目12番5号
電話	077-572-0708
開館時間	9：00～16：30 日曜10：00～15：00 （要事前予約）
アクセス	JR湖西線堅田駅 徒歩15分
備考	国指定名勝 滋賀県指定文化財



主屋表門

外村宇兵衛邸は、五個荘商人を代表する商家として隆盛をきわめた。現存する主屋は、1860年(萬延元年)に京都の大工西村富次朗・川瀬忠次郎によって建築された。2,723㎡の敷地に、家業の隆盛と共に数次にわたる新增築が重ねられ、盛時には十数棟が立ち並ぶ壮観なものであったが、現存されているのは、その半数程となった。しかし、五個荘商人の本宅の典型を示すものとして、保存整備計画工事が計画され、往時の姿に復元し、平成6年より伝統家屋博物館として一般公開されている。主屋は中央部が二階建て、北部と北西部が平屋になっていて土蔵に接続している。主屋の背面には「オクニワ」に続いて平屋のミズヤ棟が建ち、主屋の前には南側の道路に沿って便所、表門、カワトが続いている。



川戸(カワト)

敷地の周囲を流れる水路の水を敷地内に取り入れ、炊事等の日常生活に利用するところ。鯉が育てられていた。

見どころ

五個荘町は、近代日本経済の基礎を築いた近江商人の発祥の地の1つとして知られ、優れた歴史的な町並みが多く残っている地域である。古代の条里制の区画を継承する農地と浄土真宗の寺院と鎮守の杜を核とした湖東平野の典型的景観を形成している。国の伝統的建造物群保存地域にも指定されている。現在も本宅として居住・管理されているものは多く、商人屋敷も公開されている所が5ヶ所ある。単体の建物見学に留まらず集落としての空間構成が味わえる。水路・白漆喰・板張り・宅地内の庭木等が美しい景観を生んでいるが、板張りには琵琶湖で使用済みになった舟板が利用され、趣を醸し出している。あつい信仰心をもって、「生業と菩薩の業」を忠実に行動にうつし、「先義後利」の精神での商いが、今広く知られている「三方よし」に繋がっている。



主と客と継承者しか上がれない2階階段に設置されている可動床板収納



取替可能な敷居と中継ぎの畳



主屋二階の座敷



近江商人は他国で店を出した後も出身地に居宅を持ち、妻や子供たちが中心となって留守宅を守った。それが「本宅」である。商人たちの生活は華美ではなく堅実なものであったが、庭園や茶室を持ち、文化的な質の高さがうかがえる住まいとなっている。また本宅は客を迎える場であり、妻による丁稚たちの育成の場であった。近江商人の妻の教養は重要な役割を担っていた。

旧外村宇兵衛邸保存整備事業報告書
東近江市五個荘金堂伝統的建造物群保存地区保存計画 参照



敷地東部(川戸)側の町並み

建物名称	外村宇兵衛邸
建築年	1860年(萬延元年)
構造・様式	木造2階建て・瓦葺
所在地	東近江市五個荘金堂町645番地
電話	0748-48-5557
開館時間	9:00~16:30
	月曜日・祝日の翌日・年末年始 休館
アクセス	JR琵琶湖線 能登川駅から「近江鉄道バス神崎線」 ぷらざ三方よし前下車 徒歩5分
備考	市文化財史跡指定

大津町家の宿 粹世

滋賀県大津市

おおつまちやのやど いなせ



大津町家の宿 粹世

改修中にトタンを剥がしたところ現れた黒壁を基に、黒大津壁を復元した外壁。白漆喰の虫窓も手を加え復元されている。内部の階段壁は、既存壁に合わせて、黄大津壁、浅黄大津壁で仕上げられ、大津町家の特色が伺える。改修計画により、逆勝手に掛け替えられた階段からは、中庭を望めるようにひと工夫されている。



見どころ

昭和8年（1933年）に建てられた米問屋の店舗兼住宅を、大津市で初の空き町家を活用した外国人観光客向け宿泊施設として再生したのが、大津町家の宿 粹世である。伝統木造構法を活かした構造設計、米問屋ならではの重厚で風格ある大津町家のディテールを継承しつつコンバージョンされた室礼は、外国人に限らず、日本人にとっても懐かしくて心地よい。オーナーが建築士であり、自らが設計・監理された点においても興味深い建物である。まずは宿泊して、この土地の歴史文化に触れながら、和の趣と昭和レトロが融合した魅力的な和の空間を堪能することをお奨めしたい。

奥へと続く通り土間とその上部に広がる火袋、健全な状態の木組みは当時のままでありながら、宿泊施設として改修するにあたり直面した建築的問題、法令的課題に対する解決策は大いに参考になる。



16畳のコミュニティスペース



蘇った庭

建具、照明器具、金物等の殆どを再利用している。新調するにあたっては、既存デザインを踏襲することで調和に配慮し、落ち着いた居心地の良い空間演出に繋がっている。客室は全室5部屋。往時の面影を至るところで感じられる町家の宿である。16畳のコミュニティスペースでは、地域文化に触れるイベントや集まりが賑やかに催されている。



通り土間と火袋



客室 秋月



客室 夕照

建物名称	大津町家の宿 粹世
建築年	昭和8年（1933年）
構造・様式	木造2階建て
所在地	大津市長等3丁目3-33
電話	077-510-0005
H P	www.inaseotsu.com
開館時間	9:00~21:00（電話対応時間）
アクセス	JR琵琶湖線大津駅徒歩20分 タクシー5分
備考	国登録有形文化財（粹世主屋）

公人屋敷（旧岡本邸）

滋賀県大津市

くにんやしき



主屋と表門



米蔵と馬屋

敷地奥の現存する米蔵は、公人として徴収した年貢米などを蓄えておく延暦寺専用の米蔵で、馬屋は主に滋賀院門跡等にあいさつのため坂本に訪れた上級武家の馬を預かる施設として設けられていた。（手前は、解体された、離れの跡）

見どころ

坂本は、徳川幕府から延暦寺の寺領として寄進されていたため、幕府や大名からの支配は受けなかったが、代わりに「公人」（くにん）と呼ばれる人々が置かれた。「公人」とは、延暦寺の僧侶でありながら、妻帯と名字帯刀を認められ、三塔十六谷からなる延暦寺の堂舎・僧房に所属し、治安維持や年貢・諸役を収納する寺務を務めていた人々を言う。延暦寺の諸行事が滞りなくおこなわれるため、社会の安定に大きな役割を果たしていたのが公人達である。岡本家は代々公人を務め、家屋は全体に公人屋敷としての旧状をよく留めた社寺関係大型民家の特徴を示す住宅である。明治維新の神仏分離の折、延暦寺を離脱し、日吉大社の神職となったことから、社家となり現在に至っている。桁行八間、梁間五、五間切妻平入りで、南北に縁側、東西に下屋を配している。

座敷横、奥の四畳間は「神前の間」と呼ばれ、祖霊社が設けられている。この点が一般の住宅と異なる所。岡本家が延暦寺公人衆を離脱する明治初期までは、仏間であったと思われる。



神前の間



玄関右手側に取り付けられた鳥籠の様な窓。



通りニワより、玄関・表門をみる。年貢米を乗せた馬は、この通りニワを通ったと推測されている。



台所



座敷や神前の間には、江戸中期に活躍し、晩年を坂本で過ごした横井金谷（1790～1832）の描く襖絵（現在は大津市歴史博物館所蔵）が据えられている。

坂本は、比叡山延暦寺と日吉大社の門前町として発展してきた、神と仏が住まう祈りのまちである。大きな特徴は、里坊と石垣。石垣は穴太衆積と呼ばれ、穴太の地に住む石工たちが、最澄が比叡山に延暦寺を開創するにあたり、最澄とともに比叡山に登り土木工事に携わる中で、高度な職能集団を形成していった。「里坊」制度ができ、山上の僧侶は60歳を向えと山をおり、坂本に住居を設けた。里坊は、道路に面して野面石を積んだ穴太積みの石垣を設け、その上に土塀や生垣、竹垣を配し、主屋を囲んでいる。江戸時代前期から後期にわたり築城で養った石垣技術の粋を集めて構築された石垣と、「里坊」という住居形態でつくられた町並みは、一体となって歴史環境を形成している。個の建物と共に、町全体が興味深い地域である。



穴太衆積

大津市観光振興課、坂本観光協会資料
「穴太衆石積みの歴史と技法」 福原成雄 参照

建物名称	公人屋敷（旧岡本邸）
建築年	1864年（元治元年）
構造・様式	木造2階建て・瓦葺
所在地	大津市坂本六丁目27-10
電話	077-578-6455
開館時間	9:00～17:00（入館は16:30まで） 月曜日・祝休日の翌日 休館
アクセス	JR湖西線 「比叡山坂本」 駅から 徒歩10分 京阪電車 「坂本比叡山」 駅から 徒歩1分
備考	大津市指定文化財（建物）・伝統的建造物群保存地区



主体部と玄関を含む外観

旧伊庭家住宅は、住友第2代総理事を務めた伊庭貞剛が、四男の沙沙貴神社の宮司や旧安土村村長を務めた伊庭慎吉の住居として建てた邸宅で、ウィリアム・メレル・ヴォーリズに設計を依頼。洋館を基調としながら、和室要素を取り入れた木造住宅で、1913年（大正2年）に完成されている。後日、1931年～1933年（昭和6～8年）と、1941年～1945年（昭和16年～20年）に2度改修、増築されている。建物は洋館の主体部と和風の玄関部とで構成されている。主体部の外観はハーフトィンバーと呼ばれる化粧梁で細分化された意匠の外壁に、傾斜の強い天然石スレート葺きの切妻屋根を乗せて煙突を備えた、英国の伝統的な様式を一部に伝える洋館となっている。また、玄関は、入母屋造りで妻入り棧瓦葺きの和風玄関となっている。和風玄関は、後に増築された所で、建築当初は洋館建てだったが、後の増改修で和風様式が多く取り入れられた。ヴォーリズの初期の作品として、また、生活様式の変革期の住宅として、貴重な建物である。



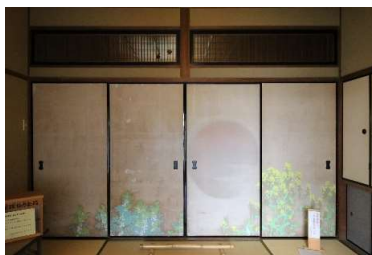
玄関へのアプローチ



庭側からみた主体部

見どころ

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの住宅は、住まい手の日々の生活を大切に考えられたプラン構成が特徴となっている。「ハレ」の場に重きを置いたそれまでの住宅に代わり、日々の生活に重きを置き、台所は優しい光のあたる位置に配置し、衛生面や動線への配慮がなされている。また、洋館の中に多くの和風テイストが組み込まれ、大胆な和洋折衷も違和感なくまとめられている所が魅力的である。1階は外観からは想像できないが、書院風の座敷が設えられ、網代が組まれた天井や船底天井等、和を基調としている。食堂・階段ホールの洋風空間には、小丸太、竹、ナグリ等の和室要素が随所にとり入れられている。また、窓枠、暖炉のタイル、照明器具の設置や出隅処理等、細部にまでこだわった部分を見るのも楽しみとなる。



春の図の襖絵



秋の図の襖絵

ジャパニズルームとも呼ばれる玄関側の和室には、高倉観崖作の「春の図」の襖絵がはめられている。その裏には、「秋の図」が描かれている。ゲストルームとして使用され、親交のある多くの芸術家たちが集った部屋と思われる。



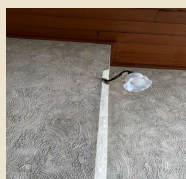
台所1



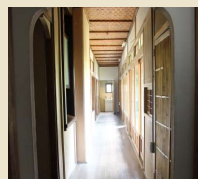
台所2



照明器具の設置



壁の出隅処理



廊下の網代天井



アトリエの入口、杉の一枚板による板戸が使用されている。

2階は洋風を基調としている。この部屋は、絵画の勉強でフランスに留学していた慎吉のアトリエとして使用されていた。

「旧伊庭家住宅」内資料 参照



食堂



食堂奥の暖炉



楽しげに貼られたタイル

建物名称	旧伊庭家住宅
建築年	1913年（大正2年）
構造・様式	木造2階建（一部屋根裏3階） 天然石スレート葺き・瓦葺
所在地	近江八幡市安土町小中191
電話	0748-46-6324
開館時間	10:00～16:00（入館は15:30まで） 月・火・水曜日（祝日の場合開館）祝休日の翌日 年末年始 休館。*1, 2月は土・日曜日と祝日のみ公開。 平日は予約のみ
アクセス	JR琵琶湖線 「安土」駅から 徒歩7分 八日市インターから 車で約25分
備考	近江八幡市指定文化財 建造物



外観

見どころ

【母家】

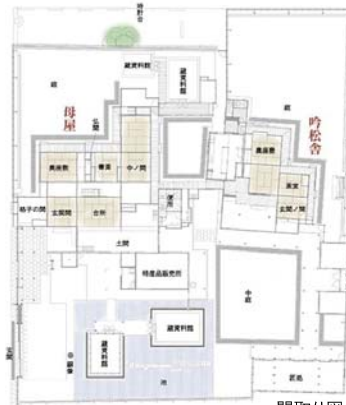
この住宅は長年火災などにあわなかったため不便となり、明治18年から5か年をかけ新築されたものである。玄関から土間に入り目に入るのが、この圧倒するような吹抜けの大空間である。部材は檜の柱を多用し、松材の太い柱を井桁状に組み上げて豪壮な木組を示すなど、上質かつ堅牢な構造形式となっている。しかも土間と居間を一体としてその四周には化粧貫を回らせ、空間の壮観さをよりいっそう演出している。この土間と居間を一体に吹き抜ける空間構造は、貫を多用する意匠とともに但馬地方の伝統的な町家建築にも共通に認められ、地理的に近接する但馬地方をも含めた地方形式をよく示す典型事例である。また、通り土間から独立して設けられた厨房空間はほとんど改造されず今日まで残されたことで、この地方の生活史を考える上での希少な資料として貴重である。



当家は平成13年9月、十四代当主にあたる稲葉昭次氏から土地を買収、家財、文書を含む建物を提供いただき、歴史的建造物の保存修理を基本に、町内外の人々が交流できる場として建物を一部改造し「豪商稲葉本家」として開館したものである。

稲葉家初代は「美濃国の武将として生まれたが、武田信玄に抗して敗れこの地に移り住んだ」と言われているが正確にはわからない。推測では約450年美濃国(岐阜県)又は信濃国(長野県)からこの地に住んだものと思われる。

初代喜兵衛代から家業は靴屋で、七代目から藩の用達とともに沿岸交易により財を成した。七代・八代から付近諸藩の金融を一手に引き受ける豪商となり、代々付近を買い取り現在の屋敷となった。



間取り図

約709坪(2,345㎡)の広大な敷地に母屋・奥座敷・蔵・匠処・雑御門・通路(土間)からなり延べ面積は1,101.45㎡となる。



1階母家奥の和室



【吟松舎(ぎんしょうしゃ)】

奥座敷は「吟松舎」と呼ばれ文政年間(1818~1829)に浜別荘として当家北側に建築、その後移築された。派手さはないものの適度に数寄屋的な要素を散りばめられて書院座敷としてのまとまりもよく、広縁を介して庭との一体的な空間が形成されている。



【雑御門(ひなごもん)】

「雑御門」と呼ばれる長屋門は平入棧瓦葺き切妻造りの2階建てである。桁行9.4m梁行3.9m。屋根の両妻側に卯建(うだつ)を上げている。但馬地方の町々に見られるが、稲葉家もこの伝統に沿って上げたものと言える

建物名称	豪商 稲葉本家
建築年	明治18年(他文政年間建物移築)
構造・様式	木造2階建て、平屋建て
所在地	京丹後市久美浜町3102
電話	0772-82-2356
HP	http://www.inabahonke.com/
開館時間	9:00~16:00(水曜休館)
アクセス	舞鶴若狭自動車道「春日IC」→北近畿豊岡自動車道「神鍋高原IC」から豊岡経由久美浜(25km)
備考	国指定 登録有形文化財(2003年1月31日指定)



聴竹居

昭和3(1928)年の創建時より変わらぬ姿で京都府乙訓郡大山崎町の天王山の麓に建つ聴竹居は、建築家・藤井厚二の第5弾の自邸として建設された名作住宅である。和洋の生活様式の統合とともに、日本の気候風土との調和を目指した昭和初期の日本の住宅として、先駆性、歴史的・文化的価値が高く評価され、藤井厚二の数ある建築物の中でも現存している貴重な物件である。それまでに建てた4軒の実験住宅の経験を活かし、真に理想的な住宅を建てるにあたって次の5つの条件をもとに聴竹居は作られた。

- 8人の人間が快適に住むのに十分な大きさとする。
- 来客の応接用に当てる空間は可能な限り減らし、家族の居住空間の快適さを第一とすること。
- 腰掛式(椅子式)生活を主とし、畳生活も混用する。
- 木造平屋の建物とし、建物のサイズを可能な限り小さくするため、調理と暖房のための電気器具を取り付けること。
- 夏季の生活の快適性を第一に考慮すること。

これらの条件は日本の住宅のテーマというべきものである。

「真に日本の気候風土にあった、日本人の身体に適した住宅」を生徒追い求めた藤井厚二の研究と実験の集大成を是非ご覧になり、体感していただきたい。

見どころ



食事室



居室とゆるやかに仕切られる

【食事室】居室の床より15cm上げて設けられた食事室は完全に仕切らず、居室の一部となっている。ベンチシート横の台の上には花籠が吊られ、日々季節の花が盛られていた。



読書室

【読書室】居室に連続する位置に読書室と名付けられたコンパクトで機能的な設えの勉強部屋がある。わずか4畳あまりの空間に、藤井と姉妹の机と本棚が造り付けられている。子供たちの机は縁側に面して障子で仕切られ、障子を開ければ縁側越しに季節を感じる庭が望める。

【調理室】キッチンも食器棚もすべて造り付けて、作業台の引戸を開けると食事室と繋がっている。今でいう対面式キッチン。当時ではめずらしいオール電化住宅である。



客室



調理室

【客室と床の間】聴竹居の中でも特にデザイン性の高い空間。板間に椅子とテーブル、造り付けベンチが置かれ、窓には紙障子。椅子式の洋風を取り入れながら、細部を和の自然素材で構成している。

床の間は椅子に座った人に対応した目線の高さとしている。床の間と部屋を同時に照らす和紙の照明も藤井のデザインである。



縁側

【縁側】

南に面する細長い縁側。長手は約5,753mm。三面をガラス戸(ガラスは建設当時のもの)で囲まれ、深い軒裏が視線に入らないように床から1,700mm上部はすりガラスとし、下部も同様にすることで、四季折々の景色が額縁に切り取られたパノラマで楽しめる。冬の晴れた日は特に暖をとる必要もなく、効率の良いサンルームとして家事や家族の団らんの場となっていた。



角に柱を設けない手法のコーナー部分を利用した花台

涼しく暮らすための工夫も見どころのひとつである。庭の木々や深い庇が夏の直射日光を遮る。また、気流・通風を考慮した通風口、床下の冷たい空気を内部を通し屋根裏へ排出させる天井排気口や、西側に設置された通気口から地中に埋め込んだ土管を通して外気を室内に送るクールチューブは天然のクーラーである。襖や障子、欄間を開けることで風が通り抜け、家は大きな一室となる(一屋一室)。断熱は様々な研究検討の上、土塗壁を採用している。仕上げは和紙を貼るなど、天然の調湿を考えた、まさに現在の無添加・パッシブ住宅である。

建物名称	聴竹居
建築年	昭和3(1928)年
構造・様式	木造平屋建て
所在地	京都府乙訓郡大山崎町谷田31
電話	(問い合わせ、見学申込はHPから)
HP	http://www.chochikukyo.com/
開館時間	水・金・日曜日 9:00~16:00【事前申込要】
アクセス	JR山崎駅より徒歩5分 駐車場なし(近隣パーキング有)
備考	国指定 重要文化財(2017年7月31日指定)

頼山陽書齋（山紫水明処）

京都府京都市上京区

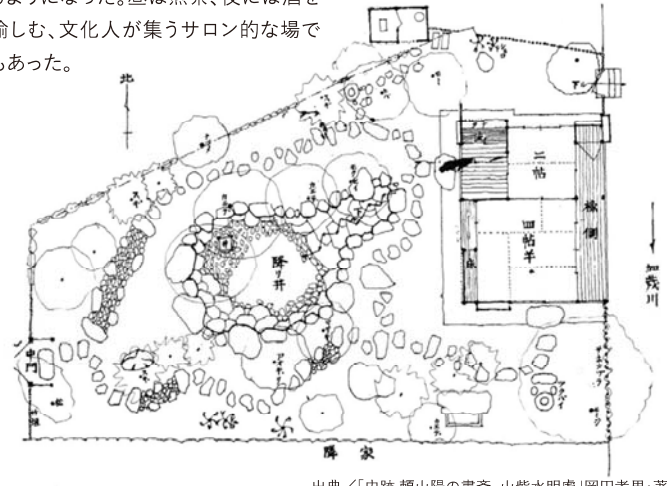
らいさんようしょさい（さんしすいめいしょ）



山紫水明処

山紫水明処は『日本政記』、『日本外史』の著者であり、江戸時代後期の歴史家、思想家、漢詩人、文人で、明治維新の原動力となった頼山陽が晩年を過ごした建物である。自宅である水西荘の庭内に増築した建物は草堂風の書齋と茶室をかねた離れであり、『日本外史』全22巻はここで完成した。

当時、川幅は広がったため現在のような垣根はなく、鴨川に面した縁側の下には清流が流れていた。東に見える鴨川の対岸の柳と遠くに見える東山三十六峰を一望する眺めを山陽は大変愛したと伝えられている。この書齋に山紫水明処という名をつけてから、一般に「山紫水明」とは風向明媚の代名詞として使われるようになった。昼は煎茶、夜には酒を愉しむ、文化人が集うサロンのような場でもあった。



出典／「史跡 頼山陽の書齋 山紫水明処」岡田孝男・著

見どころ



四帖半

【四帖半】

四帖半の天井は琵琶湖の葎(よし)の穂先を並べて漆で仕上げたものに、北山小丸太の隅木で寄棟の化粧屋根裏(四注天井)。壁の腰板と建具の腰は網代で仕上げた風流なものである。

【外格子】

内障子の棧に合わせた西側地窓上部の外格子。直線は竹で曲線は南天の枝を使った趣のある華奢な作り。

【西側地窓】

西側の地窓の室内側には網代戸、外部は雨戸。ここから茶や酒を運んだという。



西側地窓と外格子



降り井

【降り井】

かつて鴨川の伏流水が湧き出していた「降り井」。地面から2mほど下に設けられている非常に珍しい意匠である。山陽が造ったかどうかは不明。鴨川の工事により現在は枯れている。

【建物】

葛屋葺(くずやぶき)入母屋造りの建物は、鴨川べりの湿気に耐えるように堅い栗材を用い、四帖半の主室と二帖の次の間、約一帖分の板の間から構成されている。

素朴な外観ながら高度な手法と贅沢な材料を惜しみもなく使用しており、遊び心が随所にみられる。京都の蒸し暑い夏と厳しい冬の寒さ、鴨川縁の湿気対策や換気に気を配った工夫も見どころ。

●柱は皮付き赤松を由緒ある建物より譲り受け再利用したものである。

●建具にガラスが使用されている。当時、輸入の吹きガラスは非常に珍しく、1枚のガラスで小さな家が一軒建つと言われるほど高価なものであった。

●支那風の手摺の意匠は、儒学・漢詩・煎茶など中国への憧れか。手摺の外には鴨川が流れ、遙か向こうに比叡山、東山、吉田山を望む。



●京都市眺望景観創生条例に基づき特に重要な眺望景観や借景として選定された「眺望景観保全地域」に指定されており、大文字を望む景観の視点場となっている。

●見落としそうな敷地への入り口。当時の敷地は267坪あったが山陽が亡くなったあと人手に渡った。明治の孫の代で買い戻され、母屋を解体して借家を6件建てたため、路地を共用している。



路地に続く入り口

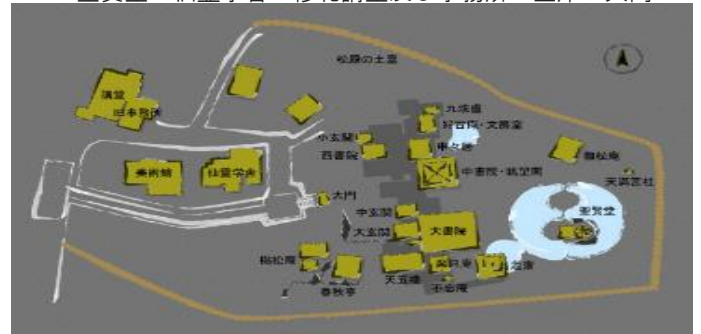
建物名称	頼山陽書齋、山紫水明処
建築年	1828(文政11)年
構造・様式	木造平屋建て・葛屋葺入母屋造り
所在地	京都府京都市上京区東三本木通丸太町上ル南町
電話	一般財団法人 頼山陽旧跡保存会 075-561-0764
HP	なし (詳細はお問い合わせを)
申込方法	見学は希望日の2週間前までに往復はがきにて【事前申込要】
アクセス	京阪電車 神宮丸太町駅より徒歩6分
備考	国指定 史跡(1922年3月8日指定)



山荘の地は今からおよそ900年前に関白藤原基房が松殿(まつどの)という別業を営んでいたところである。流祖高谷宗範(たかやそうはん)本名恒太郎が1918年(大正7年)に当時ひろく行われていた小間の茶のみならず茶道の起源である広間の茶、書院式の茶道を復興する目的で、この地を買収し、十有余年の歳月をかけて建てたものである。山荘の設計は、すべて高谷宗範自らおこなったもので、土地の高低を考え、百分の一の模型を作り建物を建て、池泉を掘り、樹木を植え、石を配した庭園。その基本は、方円の考えに基づくものである。「心は円なるを要す、行いは正なるを要す」心は円満に丸く行いは常に正しく四角く、という考えに根ざしており、その思想は随所に現れている。

小間の茶(草庵式)のみではなく、広く一般の人が楽しめる広間の茶(書院式)を広めようと考えて建てた。書院には書院式の庭園を、小間の席には草庵式の庭をもち、それぞれに主景、借景となるように工夫した庭園となっている。広大な敷地内にいくつもの建物があり、うち12棟が重要文化財指定を受けている。

- ・本館・北蔵・南蔵・蓮斎・撫松庵・春秋亭・樹松庵
- ・聖賢堂・仙霊学舎・修礼講堂及び事務所・宝庫・大門

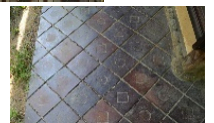
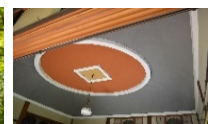


見どころ



【本館・大書院】

30帖もの大広間。東に大きく開放され、26帖分の折上格天井はさらに空間を広く見せる。床柱は大阪の旧天王寺屋五兵衛の屋敷の大黒柱を削ったものと伝えられる。鴨居は節無し五間通しの杵材を使用。



【春秋亭】

太鼓胴張りの塀に囲まれた茶室で新緑、紅葉の時期が映える。床柱は樺で、外回りの柱は桜、楓の自然木を使用している。天井・土間タイルにも正方形と円のモチーフ。



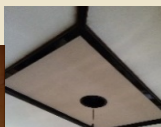
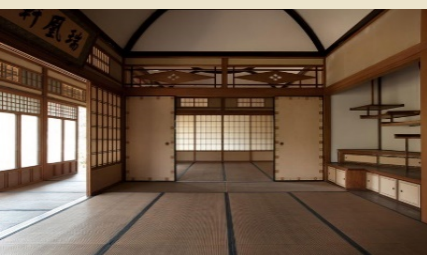
【蓮斎】

円池の上に建つ八畳書院で唐物机を床に使用し、床柱は塗仕上げ。外観は屋根が宝形造りの本瓦葺に銅板の庇がつく。建物の正方形と円池とが重なり、幾何学的なモチーフがここでもみられる。



【楽只庵】

7帖の茶室は大阪の旧天王寺屋五兵衛の屋敷から移築。蔵の轆轤の転用材と伝える床柱を備える袋床や化粧屋根裏天井など趣向に富んだ意匠で構成される。



【中書院/天井】

東向き10畳次の間8畳を持つ茶室で、床脇にかすみ棚を持っている。別名瑞鳳軒。1925年(大正15年)9月25日スウェーデン皇太子妃来荘のとき、お休みいただいたことによる。庭正面の三日月形の石は嵯峨天皇ご遺愛の手水鉢と伝えられている。

建物名称	公益財団法人 松殿山荘茶道会
建築年	1918年～
構造・様式	近代和風建築
所在地	京都府宇治市木幡南山18
電話	0774-31-8043
H P	http://www.shoudensansou.jp
アクセス	JR奈良線/京阪電鉄宇治線/木幡駅下車徒歩
備考	通常、見学については事前予約要

がんこ「平野郷屋敷」(旧辻元家住宅)

大阪府大阪市

がんこ「ひらのごやしき」(きゅうつじもとけじゅうたく)



外観

旧辻元家住宅は平野郷鞍作(現・大阪市平野区加美鞍作)の豪農辻元家の本宅として江戸時代初期に建設された近世和風建築である。通称は平野郷屋敷。約1100坪の敷地に、主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っており、床面積合計は約804坪。

1990年からレストラン「がんこ平野郷屋敷」の施設となりまた1993年からは「平野町ぐるみ博物館」を構成する施設となって、屋敷内に「くらしの博物館」が設けられた。

(ウィキペディアより)



くらしの博物館

見どころ

約1100坪の敷地に、主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っており、敷地の多くを占める日本庭園は、大阪万博の日本庭園を手がけた木戸雅光による作庭である。大阪市南部の平野区は、堺などと同じく自治都市であり、豊臣氏の正妻おねの領地であったため、大阪の陣の後も自治権を維持することができた。大阪が東洋のマンチェスターと呼ばれる所以の綿産業の中心地であり、豪農豪商の家が多く、戦禍にあっていないため、古い寺社、民家が今も残っている。辻元家はその一画にあり、江戸時代より庄屋・村長などの要職に就き、苗字・帯刀をを許された豪農である。平野郷屋敷は、400年前の江戸時代初期に建てられ、現在は寿司、和食のチェーン店が購入し「がんこ平野郷屋敷」店として営業している。過去に重要文化財の指定の話があったらしいが、古い母屋に接続の増築が多く、復元が難しいので断ったとのこと。辻元家が所有していた絵画、茶器など文化財が店内と衣裳蔵だった「くらしの博物館」に展示されている。大阪府建築士会が毎年実施しているヘリテージマネージャー養成講座の見学先としても採用されている。大阪市立工芸高校が広報動画を製作している。<https://www.youtube.com/watch?v=V0oJNVI3UI>



長屋門
奥に母屋玄関が見える。玄関は明治に入って増築された



庭には70種類の植物が植えられている。雑木林をイメージして造られたようだ。



くらしの博物館内部
「伊万里赤絵」や「楽焼」の茶碗の他、室町時代の画僧、吉山明兆の作とされる「飛鯉之図」や、江戸時代中期の絵師である伊藤若冲による「水鳥」の掛け軸など、非常に文化的価値のある作品を観ることができる。



母屋全景。



玄関ホール



庭を見渡せる客室

建物名称	がんこ・平野郷屋敷(旧辻元家住宅)
建築年	江戸時代初期
構造・様式	木造・近世和風建築
所在地	大阪府大阪市平野区加美鞍作1-3-19
電話	06-6796-0728
H P	https://www.gankofood.co.jp/shop/detail/ya-hiranogou
開館時間	平日11:00~15:00 17:00~22:00 土、日、祝 11:00~22:00
アクセス	J R関西本線 加美駅 徒歩3分
備考	

旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）

大阪府吹田市

きゅうにしおけじゅうたく(すいたぶんかそうぞうこうりゅうかん)



主屋全景

旧西尾家住宅は、平成21年（2009年）12月8日、重要文化財に指定された仙洞御料庄屋屋敷である。数寄屋風を意識した主屋、茶道藪内家の指導になる茶室、牧野富太郎の関与が伝えられる温室、建築家武田五一が和洋折衷の意匠を試みた離れなどで、文化性に富む優れた建築である。日本を代表する音楽家、貴志康一の生家でもある。近代の生活や文化が見事に体現された和風住宅建築として極めて優れている。



積翠庵

見どころ

仙洞御料庄屋の伝統を感じさせる表門、主屋の式台玄関、大座敷と次の間との境の置上げ技法による菊華をあしらった欄間や水仙の釘隠し、大正頃のガラス戸のある広縁、箱階段や電話室、台所南壁面の刃形開閉器を備えた古風な配電盤。また、台所には武田五一デザインといわれる家具等がある。離れでは和風棟土縁の丸窓や皮付き丸太の垂木を並べた化粧屋根裏の渡り廊下や洋風棟応接室のステンドグラスやサンルームの菱形ガラスの嵌め殺し腰板等がある。又、離れの屋根瓦はアール・ヌーヴォー風とも言われている。



【主屋】

棧瓦葺入母屋造り、本二階建の豪農の建物である。居住棟、玄関棟、計量部屋棟の3棟で構成され、南側には式台付の玄関があり、接客用の六畳の茶室（味々庵）がある。西側奥に十二畳半に床、床脇、付書院を設けた大座敷、その手前に十畳の間があり、南側には幅一間の広々とした縁側が廻っており、全面カットガラスのはまった引違戸が建て込まれ、極めて華やかな雰囲気を出している。



【積翠庵（せきすいあん）】

第十一代当主與右衛門義成は藪内流十代休々齋に師事し、藪内家の茶室「燕庵」と「雲脚席」の写しといわれる積翠庵を建てた。母屋西側の庭には桂離宮の卍亭とも箱根三井別邸の四腰掛の写しともいわれる四阿がある。



【離れ】

武田五一の簡素で洗練された和風意匠の和風棟とピリヤード室、応接室、それに付属するサンルームの洋風棟が渡り廊下で繋がれている。全体としてゆったりしているのは当時には珍しいメートル・モジュールで作られているからである。応接室には武田五一デザインによる花と鳥をあしらったアール・ヌーヴォー風の質の高い意匠のステンドグラスや、セセッション風のオリジナルの照明器具が残っている。また、五一の住宅改善の提案を具体化した水廻りの工夫がみられる。流しと一体となった開放的な出窓や通風への配慮がなされている。水洗便所のための浄化槽なども設けられていた。



建物名称	旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）
建築年	（主屋）1895年（明治28年）
構造・様式	木造一部2階建て・数寄屋
所在地	大阪府吹田市内本町2丁目15番11号
電話	06-6381-0001
H P	http://www.suita.ed.jp/hak/Kyunishioke/kyunishioke.html
開館時間	9:30～16:30（月曜休館）
アクセス	JR吹田駅又は、阪急吹田駅下車徒歩10分。
備考	平成21年（2009年）2月8日 重要文化財に指定 （主屋以外の見学は要予約）

堺市茶室 伸庵・黄梅庵

大阪府堺市

さかいしちやしつ しんあん・おうばいあん

千利休をはじめ多くの茶人を輩出した堺の茶室と千利休の茶の世界に触れる。

世界最大級の墳墓・仁徳天皇陵古墳前の大仙公園内には国登録有形文化財である堺市茶室「伸庵」「黄梅庵」がある



〈写真：堺観光ガイドHP〉



伸庵 〈写真：堺観光ガイドHP〉

【伸庵(しんあん)】

昭和4年に数奇屋普請の名匠といわれた仰木魯堂が粋をこらして建てた茶室で元東京芝公園にあったものを昭和55年に福助株式会社から寄贈され移築。一部2階建の棧瓦葺の建物で、中庭を囲み玄関・広間・茶室・座敷等が配置されている。各室の柱間寸法の決め方や畳の寸法は江戸間や京間、中京間を組み合わせた特色ある間取りで、面皮材や丸太材、角材の柱材も適所に用いる工夫が見られる。茶室は伝統的な平三畳台目の形式を踏襲しながらも、貴人口を併用することで客座の開放感など近代らしい空間が作られている。茶室を含めて10室の和室がある。

見どころ

2つの移築された建物をつなぐように露地が整備され、元々この場所に建てられていたかのように馴染んでおり、季節の風景とともに和の意匠を体感することができます。



黄梅庵 躰口



貴人口



待合

躰



伸庵



伸庵 立礼席



黄梅庵 〈写真：堺観光ガイドHP〉

【黄梅庵(おうばいあん)】

奈良県橿原市今井の豊田家住宅（国指定重要文化財）にあった江戸時代からの茶室を、日本の電力開発に尽力し茶道の四天王の一人とされた故松永安左衛門翁（耳庵）が譲り受けて改装し小田原で愛用されていたもので、昭和55年に遺族より寄贈され移築したものである。庵名は梅の実が黄熟する頃に完成したことから、耳庵によって命名。外観は銅板葺きの屋根を重ね合わせた変化に富んだ構成で、内部は八畳敷の広間と小間と勝手水屋等からなり、広間の正面には床を構え、天井は化粧屋根裏とした軽快な数寄屋造である。また、小間は平三畳で下座床を設け炉は向切としている。豊田家の頃には今井宗久の茶室であったと伝えられていたが、建築様式的にはその頃まで遡ることが難しく、建築された年代等は不明である。しかし堺の茶人今井宗久・宗薫親子ゆかりと伝えられる茶室を耳庵が移築し愛用したことも、歴史的価値を高めている。

建物名称	堺市茶室「伸庵」「黄梅庵」
建築年	「伸庵」昭和4年 「黄梅庵」江戸時代
構造・様式	「伸庵」木造2階建 「黄梅庵」木造平屋建
所在地	堺市堺区百舌鳥夕雲町2丁（大仙公園内）
電話	072-247-1447
H P	https://www.sakai-tcb.or.jp
開館時間	9:30～16:30（月曜休館）
アクセス	JR阪和線百舌鳥駅徒歩6分 駐車場有
備考	堺市登録有形文化財

（写真：個人撮影）

さかい待庵・無一庵（さかい利晶の杜）

大阪府堺市

さかいしちやしつ さかいたいあん・むいちあん

堺出身の偉人千利休と与謝野晶子をクローズアップしたミュージアム「さかい利晶の杜」が千利休屋敷跡の前に2015年に開館した。そこには千利休作とされる茶室が復元されている。



さかい待庵（写真：さかい利晶の杜HP）



さかい待庵（写真：さかい利晶の杜HP）

【さかい待庵（たいあん）】

京都府大山崎町の妙喜庵にある「国宝待庵」は千利休作で唯一現存する茶室であり、利休が豊臣秀吉の山崎城内に営んだ簡素な素材で造られた、二畳隅炉の極侘びの茶室を移築したものである。「さかい待庵」は「国宝待庵」の造形性で床の間口幅や炉の大きさなどの不可解な問題点を洗い直し、その祖形を復元している。

見どころ

建造当時の利休の構想を文献等から読み取り復元されている。利休の茶の世界・茶室に対座した時の距離感や空間を体感して頂きたい。



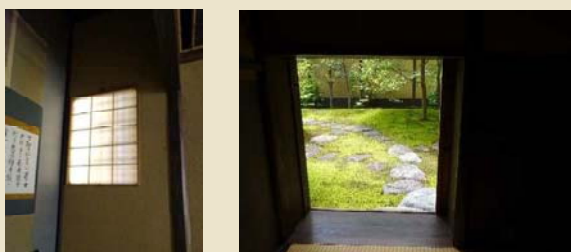
1尺3寸4分角の隅炉と5尺の床



天井

躰口

さかい待庵（写真：個人撮影）



無一庵（写真：個人撮影）



無一庵（写真：堺市より提供）

【無一庵（むいちあん）】

天正15年10月1日に催された北野大茶の湯において、豊臣秀吉・今井宗久・津田宗及の四畳半と共に構えられた利休の四畳半の復元である。



千利休屋敷跡（写真：さかい利晶の杜HP）

建物名称	さかい利晶の杜 「さかい待庵」 「無一庵」
建築年	2015年
構造・様式	木造平屋建
所在地	堺市堺区宿院町西2丁1番1号
電話	072-260-4386
H P	https://www.sakai-tcb.or.jp
開館時間	9:00～18:00（月曜休館）
アクセス	阪堺線 宿院駅徒歩1分 南海高野線 堺東駅よりバスで約6分 南海本線 堺駅より徒歩で約10分／バスで3～5分

適塾 旧緒方洪庵住宅

大阪府大阪市

てきじゆく きゅうおがたこうあんじゅうたく



【外観】



【客座敷】 都会の喧騒を忘れそうな静かな時間が流れる-⑥



【客座敷と大阪欄】



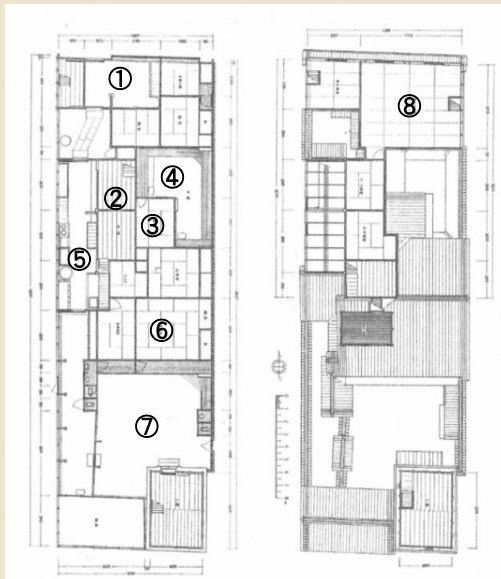
【欄間模様】 【格子】

大阪市中央区北浜のオフィス街に現存する適塾は、我が国唯一の蘭学塾の遺構である。現在は国史跡・重要文化財として内部を鑑賞することが可能になっている。適塾は、蘭医学研究の第一人者とされる蘭方医緒方洪庵（1810-1863）が1838（天保9）年に開いた塾で、ここでは西洋医学の研究をはじめとして、種痘事業やコレラ治療など、大きな医学史上の業績が生まれた。また、適塾は幕末から明治維新にかけて、近代日本の国家形成に関与する幾多の人物を輩出した。門下生の数は、1844（弘化元）年以降の入門者の署名帳「姓名録」に記載されただけでも636人、このほかに通いの塾生や1843年以前の門人等を含めると、史料から判明する範囲でも1000名を超えるものと推定される。塾生以外に教えを乞うた者も多数あると考えられる。現存する適塾は、1845（弘化2）年に洪庵が当時の過書町に町屋を購入し、瓦町の旧適塾から移転して拡張した建物である。「適塾」の名称は、洪庵の号「適々斎」にもとづいて名付けられ、「適々斎塾」、略して「適々塾」「適塾」とよばれた。適塾の元塾生らを中心として創立された大阪医学校は、幾多の変遷を経て、大阪帝国大学医学部、そして大阪大学医学部へと発展し今日にいたっている。

[大阪大学適塾記念センター HP より]

見どころ

大阪北浜の高層ビルが建ち並ぶ街に戦禍を免れた最古級の近世大坂の町屋であること、オモテの店構えと奥の住居部分をつなぐ町屋形式で関西では「表屋造」「出店造」と呼ばれ、かつては船場に多く存在した町屋を見ることができる。



【1階】

【2階】

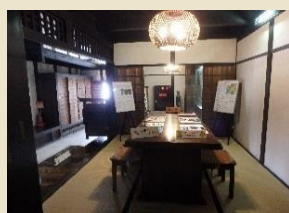
敷地464㎡
間口11.9m
奥行38.9m



【土間吹抜け】-⑤



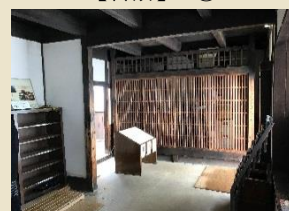
【中庭】-④



【台所】-②



【書齋】-③



【玄関】-①



【主屋の庭】-⑦



【塾生大部屋】全国から集まった塾生が生活と勉学に励んだ部屋-⑧

建物名称	適塾 旧緒方洪庵住宅
建築年	寛政4年(1792年) 大火、現在の建物はそれ以降の建築
構造・様式	木造一部2階建
所在地	大阪市中央区北浜3丁目3番8号
電話	06-6231-1970
H P	http://www.tekijuku.osaka-u.ac.jp/
開館時間	午前10時～午後4時 休館日 月曜日 他
アクセス	大阪メトロ淀屋橋駅から徒歩約5分
備考	国指定 史跡・重要文化財 写真提供 大阪大学適塾記念センター

寺西家阿倍野長屋

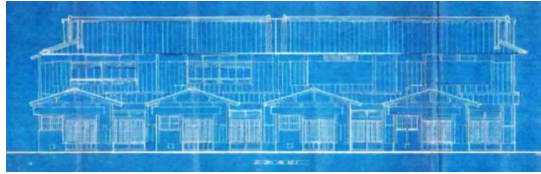
大阪府大阪市

てらにしけあべのながや



改修後

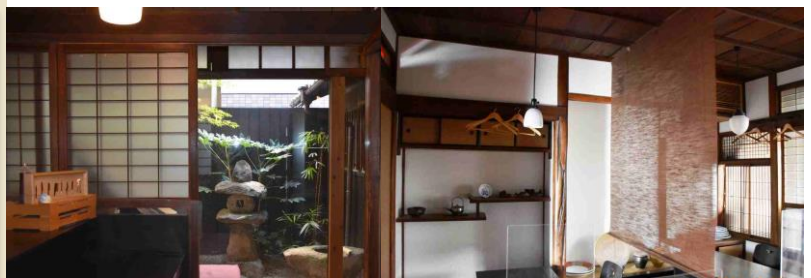
改修前



創作中国料理 AKA (あか)



焼肉 三谷家 (みたにや)



豆腐と京懐石 旬彩 旨魯 (しろ)



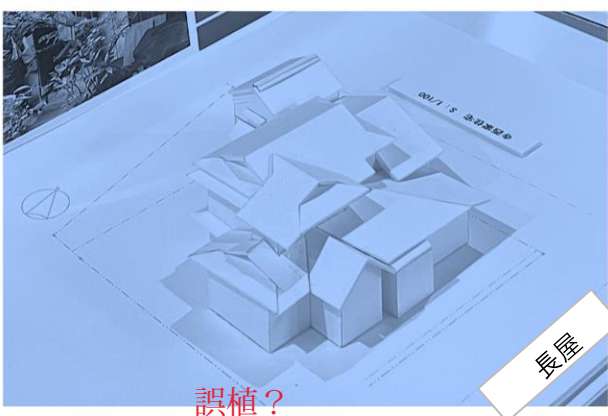
イタリアンキッチンバー 混 (こん)

* 2021/10/31現在のお店情報

見どころ

2003年12月25日に長屋としては全国初となる国登録有形文化財となった寺西家阿倍野長屋は、4軒長屋2階建てであり、防火上では一軒ずつに分かれ、中間に防火壁を立ち上げている。各戸ごとに玄關庭を設け、背面側に坪庭を配する平面計画である。2階を接客用空間とする点や建築当初から都市ガスが整備され、ガスコンロ、ガス風呂を持つ長屋であった。取り壊してマンションを建築する計画もあったが、2004年に宮大工によって再生され、飲食店舗として現在に至っている。戦前の長屋建築の好例である。

2006年には『大阪都市景観建築賞』を受賞している。見学だけという無粋なことはせず、建物のあちらこちらに見られる伝統を生かした粋な計らいを探しながら、是非食事を楽しんでいただきたい。



長屋の前の道を挟んで建てられたいる寺西家母屋・蔵も国登録有形文化財に登録されている。大正15年に建築された木造瓦葺2階建入母屋造である。ギャラリーとしてオープンしている時以外は見学不可である。上の模型写真は、住吉区・阿倍野区の蔵調査をしている「すみよし蔵部」が制作した母屋・蔵の模型である。平成17年に店舗として改修され現在にいたっている。



発酵 ルパン

建物名称	寺西家阿倍野長屋
建築年	1932年(昭和7年)
構造・様式	木造2階建て入母屋造
所在地	大阪市阿倍野区阪南町1-50-25
H P	www.teranishike.com
アクセス	大阪メトロ御堂筋線「昭和町」4番出口を出て徒歩
備考	登録有形文化財(建造物)



外観

大阪木材仲買会館は、コンクリートのビルがあふれる都市の中に建つ、木の温もりを持った日本初の耐火木造オフィスビルである。大阪の街なかを歩いていると突然木の建築が現れ驚く。既存の桜の木を抱くように囲んだアール平面形状の深い軒が下から見ると反り屋根のように見え、あらわしとなった木材とともに和を感じさせる。内外部ともに木材がふんだんに使用され、都市に居ながら森の中の伝統建築の中にいるようなやさしさと、豊かさ、静かさを感じる建築である。



桜の時期の外観

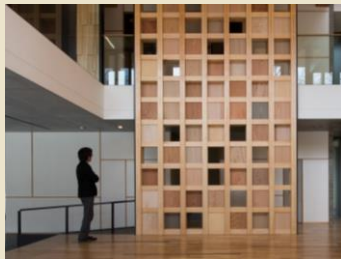
見どころ



深い軒とバルコニー
木材を風雨から守るための深い軒がバルコニーを兼ね、ふだんは室内と外部をつなぐ緩衝空間となっている。メンテナンスのための足場や避難経路としての機能ももつ。

格子耐震壁

エントランス正面の桧の格子耐震壁は、銘木展示としてこの建物を象徴するとともに和を感じさせる意匠となっている。



製材積層壁

エントランスホールと通用口を緩やかに仕切る積層壁。人の気配や光を緩やかに通している。



大会議室の吸音壁

大会議室の壁面は、木材のフィンガージョイント加工の木口がそのまま吸音材として埋め込まれている。



木の薄材をガラス間に挟んだ建具



和紙塗り壁



蟻型加工仕口の演台



大会議室



建物の内部は、自然光と木の質感により開放的でやわらかな雰囲気。

燃エンウッド

耐火木造と木材あらわしは、モルタルの燃え止まり層を挟んだカラマツ集成材により実現している。カラマツ材からは松やがでることもあるのだそう写真は耐火実験後の燃エンウッド。



エントランス



夜の外観

建物名称	大阪木材仲買会館
建築年	2013年(平成25年)3月
構造・様式	木造、鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造
所在地	大阪府大阪市南堀江4-18-10
電話	06-6538-2351
H P	https://www.mokuzai-nakagai.com/reserve.html
開館時間	9:00~17:00 休館日土、日、祝日、夏期、年末年始
アクセス	大阪メトロ 西長堀駅より徒歩6分
備考	要事前予約

こばやしいちぞうきねんかん



外観

小林一三記念館は、小林一三の自邸である洋館「雅俗山荘」を中心に小林一三の事業を紹介する施設として、2010年に開館した。

自邸は1937年（昭和12年）に緑豊かな五月山の山麓に建てられた。「雅俗」とはいう名称には「雅＝芸術」と「俗＝生活」が一体となった場所であるという意味が込められている。

設計は竹中工務店（小林利助）

「雅俗山荘」では1957（昭和32）年小林一三没後にその雅号である逸翁を冠して「逸翁美術館」と名づけられ、開館以来50年にわたって小林一三収集の美術品コレクションを公開してきたが、2009年（平成21年）に美術館が新設、移転したことに伴い、新たに「小林一三記念館」として生まれ変わり一般に公開された。1973年（昭和48年）に増設された現「白梅館」とともに逸翁の実績に思いを馳せることができる。

2009年に「雅俗山荘」「即庵」「費隠」「長屋門」「塀」が国の登録文化財となる。

見どころ

往時の生活スタイルがしのばれる空間

外観 当時流行したスペイン瓦を用いながらも日本の伝統的な瓦に近いぶし銀とし、またイギリス風のハーフトインバー的な表現を真壁風にまとめるなど、和洋を巧みに折衷させた手法を展開している。



内部 2層吹き抜けのホールが特徴的で庭に面する大きな窓に設置したシャッターも当時の姿のまま遺されている。



邸宅レストラン「雅俗山荘」 小林一三が食事したであろうその場所で、庭を見ながらゆったりと食事を取ることができる。



即庵 一三の考案にもとづいて京都の数寄屋師・笛吹嘉一郎が手がけたとされる。昭和12年雅俗山荘竣工時に作られた三畳台目に土間を2方に廻らせた椅子席の茶室。10席の椅子席からは畳上と同じ視線で喫茶、拝見ができるように工夫されている。和洋が見事に融合された昭和の名席といわれている。



長屋門

昭和11年の雅俗山荘建築にあたり、池田町と同じ豊能郡にあった東能勢村（現・豊能町）の庄屋・宇津呂家の長屋門を移築したと伝えられている。



費隠

昭和19年京都の寺院より移築されたと伝えられる二畳の茶室。壁の腰張りには、郷民の連判状と思われる古書が用いられている。命名、扁額は近衛文麿筆。



塀

「雅俗山荘」と同じスペイン瓦を載せた厚さ20cmの鉄筋コンクリート塀。外壁と同一仕上げとするなど本館とデザイン統一を図っている。



人我亭

昭和39年に岡田孝男氏の指導により竣工した四畳半の茶室。人我は他人と我が混然となること、客と亭主が一体となることをいう。

翁の没後建築され、毎年、翁の命日にあたる一月二十五日に逸翁茶会が茶道の三千家交替でこの茶室で行われている。

建物名称	小林一三記念館（雅俗山荘）
建築年	1937年（昭和12年）
構造・設備	鉄筋コンクリート造2階 便所（水洗浄化装置付き自然放流） 暖房（ボイラー、パネルヒーティング）
所在地	池田市建石町7-17
電話	072-751-3865
H P	https://www.hankyu-bunka.or.jp
開館時間	10：00～17：00 休館日月 （但し月が祝日、振替休日の場合は開館。火が休館）
アクセス	阪急宝塚本線 池田駅より徒歩20分
備考	国登録有形文化財指定（2009年） 雅俗山荘・即庵・費隠・長屋門・塀



逸翁美術館は、阪急東宝グループの創業者小林一三氏の自邸「雅俗山荘」の美術館を、設立50周年記念に阪急学園池田文庫の隣接地に新築移転、2009年に開館した。

「逸翁」は一三の雅号である。逸翁が収集した美術工芸品5500件を収蔵する。

逸翁は、阪急電鉄をはじめ多方面で活躍する実業家であると同時に、文化・芸術の世界でも名を馳せた数寄者であった。

関心の幅も広く、古筆、古経、絵巻中近世の絵画、日本・中国・朝鮮・オリエント・西洋を含む陶磁器、日本、中国の漆芸品に及ぶ。

新館、移転後は年に数回の企画展を開催し一般に公開している。

新たに多目的ホール「マグノリアホール」が設けられ、講演会や音楽会に使用されている。

見どころ

外観 セッキ質タイルの深みある表情。端正な和を感じる。一枚一枚異なる質感の中にマグノリアの花を模したアイアンワークが柔らかな表情を醸し出している。



4 即心庵

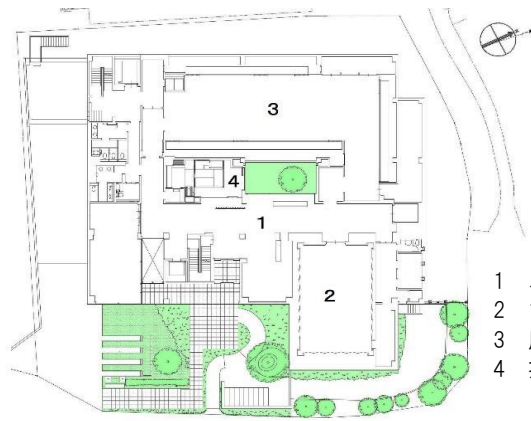
「雅俗山荘」に付随する茶室で、逸翁が自ら考案した「即庵」を美術館の館内に「即心庵」とし再現した。三畳台目の座敷を囲む椅子に座ってお茶を楽しめる、伝統と現代生活が調和した空間。

展覧会中の土曜、日曜には美術館所蔵の茶道具を用いた呈茶席がある。(道具立ては展覧会ごとに組み直される。)

※呈茶受付：展覧会会期中の土曜、日曜11：00～15：00



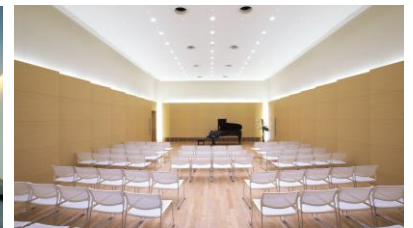
茶室より中庭を見る



- 1 エントランスホール
- 2 マグノリアホール
- 3 展示室
- 4 茶室 即心庵



1 エントランスホール



2 マグノリアホール



3 展示室

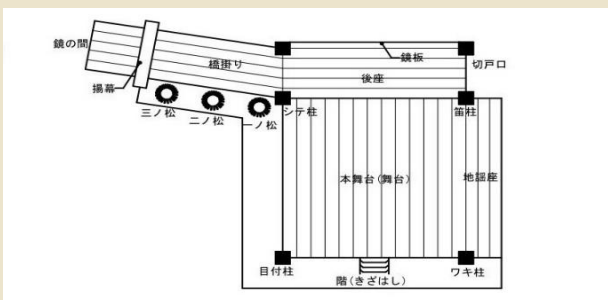
建物名称	逸翁美術館
建築年	2009年(平成21年)
構造・様式	鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造
所在地	池田市柴本町12-27
電話	072-751-3185
H P	http://www.hankyu-bunka.or.jp
開館時間	10：00～17：00 休館日 月
	(但し月が祝日、振替休日の場合は開館。火が休館。)
アクセス	阪急宝塚本線 池田駅より徒歩20分



山本能楽堂は市街地にある木造2階一部3階建ての伝統的な能舞台を持つ能楽堂である。太閤秀吉によって築かれた大阪城の武家屋敷エリアに当時の町割りのまま位置し、建物の西側には熊野街道が通り、今も昔も大勢の人が行きかっている。オフィスビルの立ち並ぶ通りから一歩足を踏み入ると街の喧騒から想像が出来ない空間が広がっている。昭和2（1927）年に山本家十代目・山本博之氏によって創設された。当時「大大阪」と呼ばれた大阪には謡曲を嗜む方も多く「文化的な社交場」をつくることを目的に船場の旦那衆によってたてられ、能楽を通して大勢の人々が交流を深めていった。

昭和20（1945）年の大阪大空襲で、残念ながらすべて焼失した。昭和21年に博之氏は「山本能楽会」をお興し、焦土と化した大阪で全国に先駆け戦後間もない昭和25（1951）年に「もう一度谷町に能楽堂をつくりたい」という船場の旦那衆や市民の熱意によって、山本能楽堂は再建された。能舞台は備蓄の檜を駆使し、宮大工の技巧を凝らし浜田豊太郎氏、山田組によって造られた。戦後の物資の乏しい中、能舞台以外の建物は古材や廃材を交え、当時手に入るあり合わせの資材で再建された。

見どころ



舞台は西本願寺黒書院の国宝舞台（桃山上の遺構）を写した方三間、切妻造りの本格的能舞台である。東側に橋脚が設けられ鏡の間へと続いている。分厚い檜皮葺の屋根が舞台の重量感を演出している。



能舞台の鏡板の力強い青々とした松は松野泰風画伯によるものである。本願寺のものにならない根上り松が向かって右へのびており一方の枝は切戸の上まで延ばしており、老松を下から見上げる珍しい構図である。



橋懸りの欄干は西本願寺の北舞台を模し、弓状に描き舞台に柔らかさを添えている。客席(見所)は1,2階とも棧敷席の舞台で(椅子席)何か懐かしい落ち着いた気分になる。また、2006年に国の登録有形文化財に登録され、文化庁の重要建築物等公開活用事業により、2012年より3年の歳月をかけ、「開かれた能楽堂」をコンセプトに耐震補強工事、設備工事、衛生工事など大規模改修工事が行われた。舞台照明のLED化、全館床暖房化、車いす対応など快適に鑑賞できる空間となっている。



「現代に生きる魅力的な芸能」として、能の普及・啓発する様々な活動が行われている。そして、観世流の能楽以外にも文楽、上方舞、落語、西洋音楽、ダンス、演劇等様々なジャンルの舞台芸術に使用されている。また、能楽堂の建物の見学会や体験講座も行われており、能舞台の秘密などいろいろなお話を聞くことができる。



音響効果を高めるために舞台下には12個の大きな甕が置かれている。



楽屋の2階3階部分にはギャラリー・資料室が設けられ、資料を閲覧できる。

建物名称	山本能楽堂
建築年	1950年（昭和25年）
構造・様式	木造2階一部3階建て
所在地	大阪府大阪市中央区徳井町1-3-6
電話	06-6943-9454（9：00～18：00）
H P	http://www.noh-theater.com/
アクセス	地下鉄谷町線・中央線 谷町四丁目 下車5分
備考	国指定登録有形文化財 山本能楽堂及び能舞台



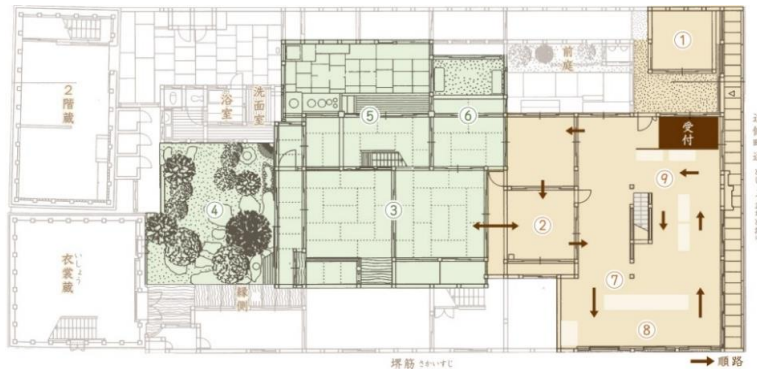
旧小西家住宅は大阪市内の製薬会社が建ち並ぶ船場・道修町の堺筋沿いの南西角の特等地に、漆黒の木造瓦葺の存在感ある一面を形成している。合成接着剤「ボンド」の製造メーカーであるコニシが、3年の月日をかけて1903年(明治36年)に完成した当時から長らくそのまま社屋として使用して来た表屋造りの貴重な空間である。

約1,060㎡の敷地内には、店舗・客間・小西家代々の主人とその家族の住まいである主屋と、主屋が用いる衣裳蔵、店舗の倉庫として使用されていた二階蔵、三階蔵の3つの蔵があり、いずれも戦火や震災の大きな被害を受けることなく、ほぼ建設当時の姿を残している。

店と住まいと目的別の複数の蔵という大阪の商家の完成形を今に残していると言える。合理的ながら細部の美の尊重と匠の登用に、造詣の深さ、船場商家の美学を感じる。これまで内部は非公開であったが、コニシ創業150周年記念事業として1年の期間をかけて史料館に改修され、2020年より一般公開されるようになった。



【堺筋の交差点からの敷地全体の様子】
街路樹のある南北の堺筋と東西の道修町通。
史料館は南側に入口を構えている。



見どころ

コニシ創業者である初代小西儀助の養子の北村伝次郎(二代目小西儀助)によって新社屋として建設された旧小西家住宅。秀でた商才の持ち主だったという二代目儀助の細やかな工夫が随所に見られる。



【⑤台所・炊事場】 【⑤台所上部の梁】

家族と従業員の50人以上の食事を賅った“へっつい(カマド)”のある台所と炊事の蒸気を逃がす高い天井。



【③床の間と書院】 【③書院窓】

コニシの社長室として使われていた座敷(書院)。床の間の前の畳は縁をきらないようにと1.5畳に。書院窓上部の格子の組は縁起の良い数である七本、五本、三本。



【③障子】 【③欄間】

庭に面した廊下と座敷(書院)を仕切る障子には当時は貴重であったガラスがはめ込まれている。洗練されたデザインの欄間。



【執務風景】 【現在の史料館の様子】

史料館がコニシの事務所として使われていた時の様子(写真左上)と、現在の史料館の様子(写真右上)。史料館ではコニシ創業の歴史を紹介する映像コーナーや、実際に使用されていた金庫や所蔵品が閲覧できる展示コーナーがあり、旧小西家住宅の変遷は勿論、明治・大正期の商いの様子を学ぶことが出来る、貴重な場となっている。

建物名称	旧小西家住宅史料館
建築年	1903年(明治36年)
構造・様式	主屋：土蔵造り2階建、瓦葺(国重要文化財) 衣裳蔵：土蔵造り3階建、瓦葺(国重要文化財) 二階蔵：土蔵造り2階建、瓦葺(国重要文化財) 三階蔵：土蔵造り3階建、瓦葺(国登録有形文化財)
所在地	〒641-0045 大阪市中央区道修町1丁目6番9号
電話	06-6228-2847(コニシ株式会社 総務部)
H P	http://www.bond.co.jp/konishishiryokan/
開館時間	※webによる完全予約制 (詳細はwebにて随時要確認)
アクセス	大阪メトロ堺筋線「北浜駅」5番出口より徒歩約1分 京阪電車京阪本線「北浜駅」27番出口より徒歩約6分
備考	大阪市景観形成物指定(平成15年)



外観

見どころ

小説「細雪」の舞台というだけあって、小説の情景を思い起こすことも楽しみの一つ。2階8畳は（右上写真）、演奏会に出かけるために3姉妹が装いをこらすという優雅な「細雪」の冒頭のシーン。また、この部屋は、幸子・貞之助夫婦の寝室で、東に1間、南に1間半の窓があり、欄干がある。さんさんと陽光が差し込み、家中で一番明るく広い空間となっている。

右の写真は2階西の部屋。六甲山脈を望めるのはこの部屋のみで、山に見える風景の「外へ向かって開かれた」雰囲気が作家に「旅立ち」場面を書かせる騒動を駆り立てたと言われている。

右の写真は1階洋間に面しているテラス。庭の土の面から30センチほど高くなっており、当時をそのまま復元された。このテラスでの谷崎潤一郎と松子夫人とのツーショット写真は有名。



「倚松庵」は、文豪・谷崎潤一郎が1936年から1943年まで居住し、松子夫人やその妹たちをモデルとした小説「細雪」の舞台である。庵内には著書や参考文献等を集めた「谷崎文庫」を併設しており、「文学の庵（いおり）」として、多くの市民や観光客に谷崎文学の世界を親しんでいただくことを目的として開館されている。



2階8畳

「大」大阪（1920年代に流行した呼称）のベッドタウンとして急速に進歩し始めた阪神間の中流階級の、和洋折衷の新建築の典型的な建物。付近の一般的な当時の農家の建築様式とも異なり、「昭和初期の典型的な」住宅様式となっている。

1階は、外観の和風建築の様相とは違い、洋間、食堂、廊下、テラス等が洋風になっている。「特にまっすぐな廊下はその象徴。各部屋に行くのに別の部屋を通らなくてもいいように、しかも、和風建築のよさも取り入れて隣室との通路も設けてある。（中略）洋的合理精神と和的協調精神の見事な調和である。」（参考資料引用）

対して2階は「細雪」の登場人物の部屋となる3つの和室からなり、庭の景色と相まって、当時をしのばせる和風空間になっている。

※神戸市ホームページより一部引用



1階応接間

1階食堂

建物名称	倚松庵（谷崎潤一郎旧邸）
建築年	1929年（昭和4年）／移築復元 1990年（平成2年）
構造・様式	木造2階建て
所在地	兵庫県神戸市東灘区住吉東町1-6-50
電話	078-842-0730
H P	http://www.city.kobe.lg.jp/information/project/urban/tender/isyoan.html
開館時間	土日のみ10:00～16:00（年末年始は休館）
アクセス	JR住吉駅から南東へ900m徒歩約12分／六甲ライナー魚崎駅から北へ150m徒歩約2分／阪神魚崎駅から北へ450m徒歩約6分／市バス東灘区役所前停留所から南へ500m徒歩約6分
備考	入館料無料



長屋門

篠山市立青山歴史村は、篠山藩主青山家の明治時代の別邸（桂園舎）を中心として3棟の土蔵と長屋門から成り立っている。長屋門は篠山藩旧藩士澤井家にあった木造入母屋造、茅葺きのもので、昭和32年（1957）にこの地に移築された。文化年間（1804～1808）頃の建築と考えられている。これらの建物は、昭和62年（1987）から青山歴史村として一般公開されていたが、平成10年（1998）に歴史村を管理していた財団法人青山会から旧篠山町に全資産をご寄付いただいたのを機会に、町立（平成11年より市立）の史料館として蔵書の保管をはかるとともに大学などの調査研究にも活用されている。

また、藩政文書とともに、青山家ゆかりの品々や篠山藩校「振徳堂」の蔵書などを所蔵している。その中から、全国的にも珍しい漢学書関係の版木（篠山藩では藩士の教育のために、版木で数多くの漢学書を印刷し刊行しており、当館には版木を1200枚余り所蔵。材質は、桜の木を使用）、篠山城石垣修理伺の図面、藩政始末略、印判、鼠草紙絵巻（作者不詳。鼠を擬人化した室町時代の怪婚譚が主題で民衆の風俗等を描いている）、江戸時代の歴史文化を物語る史料の数々を展示している。

見どころ

青山歴史村は、篠山藩主青山家の別邸「桂園舎」（旧庄屋住宅を移築）を中心にして、3棟の土蔵と長屋門（移築）から成る。全国的にも珍しい漢学書関係の版木1200枚余、篠山城石垣修理伺図面、藩政始末略、印判、ねずみ草子等、江戸時代の歴史文化を物語る史料の数々を展示している。また、市民向け伝統文化関連ワークショップなども企画されている。伝統的建造物としては、主屋「桂園舎」は平入、土間+変形六間取り+縁側+庭の構成で建設当初の姿がよく残されている。また、長屋門は市内では珍しい入母屋造、茅葺の建物で、武家屋敷の多くが消滅している今日、当時の形態をうかがい知る貴重な建物となっている。

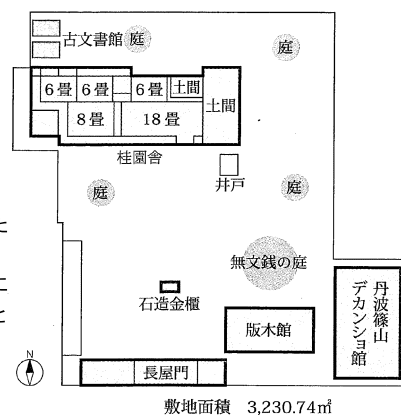


桂園舎



金櫃

篠山市指定文化財。
花崗岩の板石で組み合わせた金櫃（金庫）で、江戸時代「貨幣司」が大手馬出付近にあり、土中に埋め地下金庫として使用していたもの。
縦216cm・横120cm
深さ70cm
石厚12cm



建物名称	篠山市立青山歴史村
建築年	1804～1818年頃（1957年に移築）
構造・様式	木造平屋建・木造二階建
所在地	兵庫県篠山市北新町48
電話	079-552-0056
H P	http://www.withsasayama.jp/REKIBUN/aoyama_top.htm
開館時間	9：00～17：00（受付終了16：30）
アクセス	JR福知山線「篠山駅」→バス「二階町」徒歩5分
備考	景観重要建造物。長屋門は篠山市指定文化財。

兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅

兵庫県神戸市

ひょうごけんりつまいここうえん きゅうきのしたけじゆうたく



全景

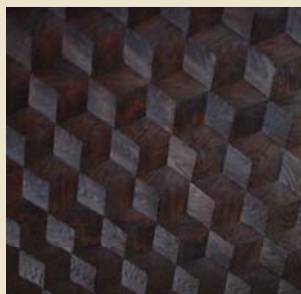
旧木下家住宅は、神戸で海運業を営んでいた又野良助氏が、私邸として昭和16年に建てられた数寄屋造近代和風住宅である。昭和27年に明石で鉄鋼業を営んでいた木下吉左衛門氏の所有となり、平成12年に木下家より、兵庫県に寄贈された。民家風の虫籠窓を付けた主屋を中心に、東面に玄関、北東に台所、北西に茶室、南東に応接室、南西に書院を配し、北側に中庭を取り込んだH字型平面となっている。木下家の所有となったのち、昭和28年頃に土蔵を移築、昭和30年代に納屋の増築などを経て、今日の姿となる。主屋（主棟）はツシニ階建てで、南面は応接室と書院が張り出し、座敷、中室の縁側からテラス状の靴脱ぎ、芝生の前庭との連続性は、和風住宅ながら洋風を想起させる構えとなっている。応接室は大壁の漆喰塗仕上げで、大理石貼りのマントルピース、アールデコ調の照明器具など、昭和初期の洋風住宅の意匠の特徴が良く現れている。茶室は、掛け込み天井や下地窓、土壁、シャレ木の床柱等が使われ、草庵風である。待合、水屋などの設えとともに昭和戦前期の雰囲気良く留めている。便所、洗面所周りは廃材の木材が使われるなど、数寄屋ならではの遊びも見られる。

見どころ

阪神・淡路大震災以後、姿を消しつつある阪神間の和風住宅のなかで、創建時の屋敷構えをほぼ完全に残す貴重な建物である。芝生敷の前庭と茶庭風の中庭には、創建時の庭造りの様子が残る。戦前期の西洋文化の生活様式（マントルピースのある応接室や大きなガラス窓）を取り入れた和風住宅であるとともに、草庵風の茶室も備える。材料には竹と桐が多く使用され、建物の細部には、数寄屋大工や職人の技による繊細なつくりが見られる。座敷の床の間の天井は亀甲網代編で、琵琶床を備える。夏は襖を藁戸に入れ替えたり、木下家より寄贈の雛人形や兜飾りや羽子板を飾ったり、月に一度はお茶会を催すなど、四季折々の日本文化を体験することができる。



芝生を中心とした明るい前庭に対して、中庭は露地（茶庭）風の和風庭園で、主庭といえる。この主庭は、四畳半茶室に付随する蹲踞と降り蹲踞という二つの蹲踞が中心となって構成されている。大振りの降り蹲踞は、中庭の主景となっており、手水鉢には見事な鞍馬石の自然石が用いられ、中鉢形式（手水鉢の周囲が海になった形式）の蹲踞として見応えがある。



中庭の様子（中央は降り蹲踞）



建物名称	兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅
建築年	1941年（昭和16年）
構造・様式	木造ツシニ階建て・数寄屋
所在地	兵庫県神戸市垂水区東舞子町11-58
電話	078-787-2050
H P	http://hyogo-maikopark.jp/
開館時間	10:00～17:00（月曜休館）
アクセス	JR舞子駅・山陽電鉄舞子公園駅から徒歩5分
備考	国登録有形文化財（主屋、土蔵、納屋）

ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）

兵庫県芦屋市

ヨドコウゲイヒンカン(キュウヤマムラケジュウタク)



アプローチより

ほぼ建築当初の姿で現存する我が国で唯一のフランク・ロイド・ライトの設計による住宅建築である。帝国ホテル設計の為にアメリカから来日したライトが、山邑酒造（現櫻正宗〈株〉）の八代目当主の別邸として1918（大正7）年に設計した。

見どころ

3階に存在する三間続きの和室は、ライトの当初の設計案には無く、施主の強い要望で遠藤新と南信により設計された。畳、襖、床の間、欄間という和室のエレメントを備えるが、仕上や造作材は洋室部分と殆ど同じ仕様である。長押の位置で室内から外に連続する庇や装飾的な地窓が、室の重心を低く保ち、和室としての落ち着きを感じさせる。傾けられた正方形の窓からバルコニーの大谷石の水盤が見え、ここにも建築家の水への拘りを感じる。建物全体はヤード・ポンド法、和室は尺貫法が用いられ、用尺の違いは壁厚で処理されている。現在、この和室では、毎年山邑家ゆかりの「雛人形展」が開催され、多くの来場者を集める。



3階の家族寝室と隣接する和室の婦人室。摺りガラスの格子戸を開けると、和室に座る人と隣室に立つ家族の視線が同じレベルとなる。家族寝室には竣工当時の家具が復元展示されている。



六代目山邑太左衛門は灘の酒に不可欠な宮水を発見した酒造家として知られる。ライトの帰国後、残されたスケッチをもとに弟子の遠藤新と南信が実施設計・監理を行い、1924（大正13）年に竣工した。芦屋川沿いの急峻な尾根の起伏に合わせた4層のフロアで構成され、建築のさまざまな場所から、周囲の自然、海へと注ぐ芦屋川の水の流れる感じることができる。建物のモチーフである幾何学的な意匠が施された扉や窓などの開口部は、光、風、緑を透過させることでそのデザインが完成され、それは和室にも連続し、随所に感じる水への視線とともに、和様の空間を見事に融合させている。この建物が内包する和の空間の在り方は、ライトが創造した自然と融和する空間構成や単純化され洗練された美しい造形が、まさしく日本的な思想やイメージを想起させるものであることを実感する。



3階西側廊下



4階食堂

近代建築の名作が次々と姿を消す一方でこの建築は幾度もの危機を乗り越え、建築当初の姿を維持し、公開されている。1947（昭和22）年に現在の株式会社淀川製鋼所の所有となり、1971（昭和46）年には一度は取壊しが決定するも保存に転じ、1974（昭和49）年、RC造の建物として、また、大正時代の建物として初めて国の重要文化財の指定を受けた。老朽化や雨漏り、地盤沈下などによる破損が激しく、大規模な保存修復工事が行われ、1989（平成元）年より「ヨドコウ迎賓館」として一般公開された。その後も阪神・淡路大震災で被災し、裏山の開発問題にも直面しながら、現在の佇まいを守り続けた。近年では、約2年間にわたる大規模な保存修理工事を経て、2019（平成31）年2月より公開中。



エントランス

建物名称	ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）
建築年	1924（大正13）年竣工
構造・様式	鉄筋コンクリート造4階建
所在地	兵庫県芦屋市山手町3-10
電話	0797-38-1730
H P	https://www.yodoko-geihinkan.jp/
開館時間	水・土・日曜日と祝日 10:00~16:00
アクセス	阪急神戸本線「芦屋川駅」より北へ徒歩10分
備考	参考文献：兵庫県建築士会『tsudoj 2011.12』 淀川製鋼所『F.Lライトの世界』

堀家住宅（一橋徳川家領庄屋）

兵庫県たつの市

ほりけじゆうたく(ひとつばしとくがわけりようしようや)



【① 揖保川から見た堀家西面の遠景】

大きなクスノキの奥に、一際目を引く堀家住宅の白壁群が見えます。6484㎡の広大な敷地の中心には巨大な主屋があり、周囲を長屋門や座敷、多数の蔵が取り囲むように一体化し、一連の白壁群となった外観は、堀家住宅の特徴といえます。年代が明確なものとしては播磨地方最古の主屋をもち、民家建造物としては 県下最大規模を誇ります。旧日飼村は1747年に一橋徳川家領となり、堀家はその庄屋を務めた豪農で、苗字、帯刀御免など、庄屋以上の処遇を得たようです。かつて、庭では時代劇のロケも行われたそうです。

■堀家住宅の建物配置図と撮影箇所



【② 主屋と式台玄関】



【③ 主屋の梁組】

◆母屋は平屋で、9間取りの平面形が元々の建物であるが、後に7回の増築を繰り返して拡張が重ねられている。

見どころ

主屋は1744（延享元）年から1767（明和4）年まで20年以上かけて建築されており、周囲の建物の殆どが江戸時代の建築で実に築250年以上となります。これらの建物は、現在までほぼ改変なく当時の姿をとどめ敷地内で一括して保存されてきた住宅としては、全国的にもまれな存在です。こうしたことから堀家住宅は敷地や附を含め、主屋1棟、座敷2棟、蔵12棟、門3棟、付属建物5棟など計23棟が、国の重要文化財に指定されています。



◆堀家の家紋「向い蝶」を刻む主屋瓦には、瓦銘（明和4年龍野城下住 三木与兵衛）と刻まれている。



【④ 長屋門】



【⑤ 主屋 次の間と上の間】



【ナマコ壁】

【⑨ 東蔵・柴小屋・漬物部屋】



【⑥ 主屋縁側と鞘の間】



【⑦ 消防設備用の雲龍水】

【⑧ 獅子をあしらった潜門の留蓋】



【⑩ 大乾蔵・八番蔵・九番蔵】

【⑪ 二番蔵】

◆主要建物は全て漆喰の白壁とナマコ壁が特徴である。

建物名称	堀家住宅（個人所有住居）
建築年	1767年（明和4年）
構造・様式	主屋：木造平屋建・一部二階建（入母屋本瓦葺き）
所在地	兵庫県たつの市龍野町日飼291番
電話	0791-75-5450 たつの市教育委員会歴史文化財課
開館	特別公開限定
アクセス	JR姫新線本竜野駅～徒歩10分、山陽自動車道龍野IC～10分
備考	平成25年8月 国重要文化財指定 参考文献：日飼自治会「日飼の歴史と文化」

姫路文学館望景亭（旧濱本家住宅）

兵庫県姫路市

ひめじぶんがくかんぼうけいてい(きゅうはまもとけじゅうたく)



市内の実業家濱本氏の別邸として、大正5年から昭和4年まで約13年の歳月をかけてつくられたものの一部である。昭和10年7月から、陸軍姫路第10師団騎兵第10聯隊長として着任された皇族・賀陽宮恒憲王殿下ご一家が生まれ、その後、須鎗氏の所有となり、第二次大戦後は、一時占領軍の高官が居住したこともあった。昭和33年3月に市の所有となってからは、「男山市民寮」の名のもと、結婚式場〈瑞泉閣〉として市民に親しまれ、昭和51年3月まで利用された。昭和62年に姫路文学館を建設することに決まり、計画の中で元の建物の西側約3分の1を残し、姫路文学館の施設として生かすことになった。和室、茶室（雄徳庵）、唐破風の玄関を修復整備し、さらに洋式応接間を増築。平成3年4月に開館、裏千家十五世千宗室が「望景亭」と命名。平成21年には、国の登録有形文化財建造物に指定された。主屋は敷地の西奥に位置しており、桁行14メートル、梁間11メートル、木造平屋建の入母屋造棧瓦葺の建物。高い基礎上に建ち、内部は十八畳の座敷に十二畳の次の間を並べ、高欄付の縁をめぐらしており、庭の眺望を意識した開放的なつくりで、欄間などの造作も洗練された潇洒な書院建築。

見どころ

■棟門■

もとの建物を移築。裏千家十五世千宗室氏の揮毫による赤杉の扁額「望景亭」をかかっている。修復時、瓦葺が銅板葺に変わった。



■茶室（雄徳庵）■

廊下から茶室に向かう正面に色鮮やかな板戸絵があり、右手にあるのが、水屋と8畳の茶室。障子の引手、綱代天井、床脇前の船底天井など、是非ご覧いただきたい。また、開口部が広くとられているので、庭園を望む風情も申し分ない。



■和室■

二間続きの広い和室。十八畳の座敷に十二畳の次の間を並べた豪華な部屋で、奥の座敷に本格的な床の間を設えた書院建築になっている。襖の引手、欄間、床の間、棚、書院の障子、長押など、細部にいたるまで、趣向がこらされている。

庭園がゆったりと眺められるようガラス戸ははめられている。ガラスは、古い時代の物らしく表面に歪みもあり、風情ある空間となっている。



↑「望景亭・庭園案内図」

■貸室■

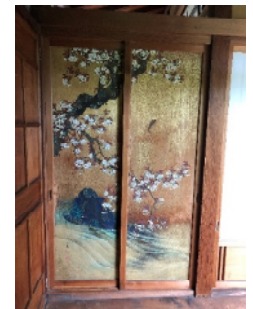
建物内の施設は、文化的な催しに利用可能。要予約。

↓玄関



■板戸絵■

建物内には、板戸絵「竹、流水」「菊、小鳥」「紅葉、清水、菊」「さつき、山吹、滝」「牡丹、木蓮、柿」「孔雀、牡丹」「山桜、流水」「鶏、白梅」と計8面を見ることができる。



建物名称	姫路文学館望景亭（旧濱本家住宅）
建築年	大正5年（1916年）
構造・様式	木造平屋建・入母屋造棧瓦葺
所在地	姫路市山野井町86番地
電話	079-293-8228
H P	https://www.himejibungakukan.jp
開館時間	10：00～17：00（入館は、16：30まで） 休館日：毎週月曜日と休日の翌日（これらの日が休日、または土、日の場合は開館）年末年始
アクセス	電車&バス：JR・山電姫路駅前の神姫バスターミナル・9・10・17・18番乗り場から乗車約6分 「市之橋文学館前」下車、北へ徒歩約4分 車：姫路バイパス「中地ランプ」下車、北東へ約15分



長屋門*

神戸酒心館の前身の一つとなる酒造会社である、銘酒「福寿」の醸造元・福壽酒造の創業は、1751(宝暦元)年 播州三木から初代が灘に出てきて酒造業を営んだことが始まりである。六甲山より海に流れる石屋川沿いに位置する灘五郷の西、「御影郷」にある。ちなみに現代の灘五郷とは、西郷・御影郷・魚崎郷(以上神戸市)・西宮郷・今津郷(以上西宮市)を指し、日本の清酒生産量の約3割がこの地域で生産されている。この地域は、1945年6月5日の神戸大空襲、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災により大きな被害を受け、その都度復興してきた。福壽酒造も阪神淡路大震災では、6つの木造蔵と1985年から文化発信基地としてイベント等に使用していた旧酒心館が全壊し、延べ約3000㎡の建物を失った。復興の過程で、次世代に灘の酒を神戸の地酒として発展させ、「福寿」の銘柄を守り続けるために、企業合同という手法で株式会社神戸酒心館を設立した。震災前から計画していた「酒蔵ツーリズム構想」を基に、「神戸酒心館」として1997年12月、免震構造の醸造工場と瓶詰工場を備えた「福寿蔵」、木造蔵を修復した多目的ホール「豊明蔵」、日本酒の資料展示や物販コーナーのある「東明蔵」、蔵の料亭・さかばやしの「水明蔵」の4つの蔵をオープンし酒文化の発信と失われた景観の保全の役割も担った施設として再興した。長屋門も地域に開かれたギャラリーとして利用されている。酒造りを通じて地域に根差した文化発信機能も備えた施設として、2000年には「メセナ大賞地域賞」を受賞した。「福寿 純米吟醸」は2008年初めてノーベル賞公式行事で供され、それ以後、日本人が受賞するたびにノーベル賞公式行事で供されている。

見どころ

豊明蔵は震災前、貯蔵庫として使用していた木造蔵である。震災前多数あった木造蔵の中で唯一再建ができた蔵として、新旧の材料がわかるように修復されている。現在は、多目的ホールとしてステージ・茶室・いろいろの間等を備え、貸しホールとして、コンサートや展示会・会議・パーティー等に利用できる。かつて酒造りに利用していた酒槽(さかふね)をリデザインした大きなテーブル席等がある。



豊明蔵(酒心館ホール内部)*



披露宴やコンサート等の利用例*



豊明蔵 外観*



水明蔵 外観



敷地内庭園は、六甲山の里山をイメージして作庭されており、国道沿いに位置することを忘れるような心地よい緑に覆われている。その庭の奥にある水明蔵(蔵の料亭・さかばやし)の客席にも、豊明蔵に設置されている酒槽(さかふね)をリデザインした大きなテーブルが中央にあり、ゆったりと庭を眺めながらの食事を楽しむことができる。



水明蔵(蔵の料亭・さかばやし)*

長屋門：
敷地内部側はギャラリーとして
地元の方々を利用する

建物名称	神戸酒心館(旧福寿酒造)
建築年	1997年(阪神淡路大震災後)
構造・様式	木造・免震RC造
所在地	神戸市東灘区御影塚町1-8-17
電話	078-841-1121
H P	https://www.shushinkan.co.jp/
開館時間	豊明蔵(神戸酒心館ホール) 10:00~21:00(利用時間) 東明蔵(店舗・展示)10:00~18:00 水明蔵(蔵の料亭・さかばやし) 11:30~14:30/17:30~22:00
アクセス	阪神電車「石屋川駅」下車、南へ徒歩約8分
備考	写真提供：*印 株式会社 神戸酒心館 参考文献：神戸酒心館設立20周年記念誌



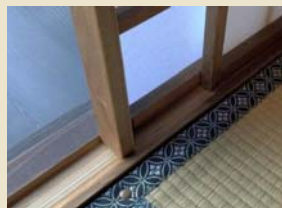
今西家書院は、永く興福寺大乘院家の坊官を努められた福智院氏の居宅を大正13(1924)年、今西家が譲り受けた。一説には大乘院の御殿を賜り移築したものと伝えられている。昭和12(1937)年8月25日、国宝保存法により民間所有の建造物として初めて国宝の指定を受けたもののひとつである。その後文化財保護法の施行に伴い、昭和25(1950)年、重要文化財となった。江戸初期、寛永7(1854)年、元治元年(1864)年、明治中期、昭和と度重なる修理を経て大切に守られ、現在に至っている。



書院

見どころ

書院造の初期(室町時代)の遺構。角柱・畳敷・障子・襖・棹縁天井等は現代住宅の和室の基本に通じるもので、和室の原点を感じることができる。庭に面する二つの間(書院)は建築当時は板敷きだったところを、江戸時代に床の間が造られ、畳敷きの二間になった。鴨居ははめ込み式で、鴨居と敷居を外すと元の板敷きの一間に戻すことができる。また、一本の敷居溝に二枚の障子が入る猫間障子は、縦の棧が同じ幅となっており、閉めると大きな障子に見え、端正な美しさを醸し出している。双折板扉は大陸から伝わった古い形式の外開きの建具。中塗り壁に何重にも和紙を貼り重ねられた壁など、寝殿造の名残りもあるが、入母屋造軒唐破風や檜皮葺屋根などに堂々たる書院造の魅力をも十分に味わうことができる。



猫間(手持ち)障子



上下2枚のしとみ戸(半節)



双折板扉(諸折戸)
お奥に乗った身分の高い方専用の出入り口

【茶室】

蹴り口はなく庭から出入。天井は杉の網代編みで中央に龍が描かれている。

【下段の間】

お供の者の控えの間。床が一段下がり、天井も低くなっている。

【網代編みの間】

太い杉の粉板の網代天井。

【煤竹の間】

昔、囲炉裏があった。天井は、幅広の煤竹を張っている。現在、畳のテーブルといす掛けの喫茶室。



平面図(出典:株式会社今西清兵衛商店 HP)



茶室



煤竹の間

建物名称	今西家書院
建築年	室町時代中期
構造・様式	木造1階建て・書院造
所在地	奈良市福智院町24-3
電話	0742-23-2256
H P	http://www.harushika.com/study/
開館時間	午前10時～午後4時(休館;月、イベント開催時)
アクセス	JR・近鉄奈良駅徒歩15分または天理行バス福智院下車
備考	国指定重要文化財 入館料:要



主屋外観

中家住宅は、大和川北岸に残る大和地方の典型的な環濠屋敷である。屋敷は外濠と内濠の二重の濠に囲まれ中世土豪の平城式居館の姿を現代に伝える。中氏の祖先は足利尊氏に従い大和に入り、この地に居館を定めた。武士として活躍した後、国替えを期に帰農し大地主となり、現在に至っている。そのため、建物は武家造りと農家造りを併せ持つ造りとなっている。主屋は万治二年(1659年)頃の創建と推定され、新座敷には安永二年(1773年)の棟札がある。その他、表門、米蔵、新蔵、乾蔵、米蔵及び牛小屋、持仏堂、庫裏の9つの建造物と、宅地、濠、竹藪が重要文化財に指定される。現在も邸内に住んで維持管理をされている。

【表門と内濠】

表門正面の内濠に掛かるはねあげ橋は、夜間には中央の板を外し、外敵の侵入を防いだとされている。表門には、橋を監視する為の物見窓がある。



【主屋】

主屋の屋根は大和棟形式で、その姿は極めて美しい。日本郵政発行の切手「日本の民家」シリーズのモデルにもなった。

土間には、11の焚口が勾玉型に並び国内最大級の竈がある。

【新座敷(勅使の間)】

新座敷は、数年に一度訪れる役人をもてなす為に建てられた、大変上質な普請である。

(天井板：春日杉、床柱：北山杉柱：樺、縁側：樺板張り)

高床になっており、主屋からは数段上がる。縁側から広がる見下ろしの眺望が絶妙である。

特別な来客時以外は使われなかったため、保存状態が良好で創建当時の姿を今に伝える。

【持仏堂本堂・庫裏】

中氏一族が祖先を弔うために、享保十九年(1734年)に菩提寺である持仏堂を建立。本堂内には多くの仏像が安置されている。僧侶の住まいである庫裏は、茅葺屋根に本瓦葺きの下屋を持つ美しい佇まいで、板の間の台所には「座り流し」や「持ち出しくど」(移動式かまど)がある。食い違い四間取りのコンパクトな空間は現代住居として住んでみたいと思わせる魅力がある。



見どころ

＜ダイナミックな架構＞
主屋は、曲がりの強い大きな地松丸太が多用されている。その姿は圧巻で、民家の力強さを十分に堪能できる。

＜おもてなしの空間＞
新座敷をはじめ、主屋の奥にある「蒸し風呂」や、内濠で観月会(船遊び)をする為の「入り船の庭」など、大変風流なおもてなしの場がある。

新座敷には「月にむら雲、波に兎」の意匠が彫られた欄間や狩野派の絵師により描かれた襖がある。釘隠し等の金物も上質なものはばかりで見どころが多い。三畳の茶室も併設されている。空間全体から、高い品格と知性を感じられる佇まいである。



建物名称	中家住宅
建築年	江戸時代
構造・様式	木造1階建て・環濠屋敷
所在地	生駒郡安堵町窪田133番地
電話	0743-57-2284
H P	http://www.town.ando.nara.jp/content
開館時間	午前10時～午後5時、見学は電話で事前に予約
アクセス	近鉄平端駅またはJR大和路線法隆寺駅からタクシー または安堵町コミュニティバス奈良交通かしの木台線 (法隆寺より約5km)
備考	重要文化財

臨濟宗大徳寺派 慈光院 書院

奈良県大和郡山市

りんざいしゅうだいとくじは じこういん しょいん



慈光院は、片桐且元の甥で当地の大名であり茶道石州流の祖である片桐石見守貞昌(石州)が、1663年(寛文3年)に、父の菩提寺として建立。片桐石州の茶の教えは、徳川家綱、水戸光圀や大名の多くが学んだ。

一之門から鬱蒼とした叢零しの石畳を歩いて行くと茅葺きの茨木城楼門がある。片桐且元の摂津茨木城の楼門(櫓門)を移設したこの門をくぐると明るく開けた庭があり、その先の右手に、大きな茅葺きの書院がある。左手には寺務所棟、書院の北側に渡り廊下で繋がる別棟の本堂がある。書院の北東と北西に趣の異なる2つの茶室二畳台目の高林庵と三畳の閑の席(逆勝手)が配されている。



見どころ

石州流茶道の祖片桐石州が父の菩提寺として建立したが、寺としてよりも境内全体が一つの茶席として造られている。表の門から建物までの道、座敷や庭園、露地から小間の席までの全てが、石州の演出そのまま三百年を越えて眼にすることができる貴重な場所となっている。書院から東南方向に庭園(史跡及び名勝指定)と大和平野の借景を見渡すことができ、まさに庭屋一如のごとく空間は他に類を見ず圧巻である。全体的に天井や鴨居の高さが低く押さえられ、座敷に座ったときに最も安らぎや落ち着きが出るように考えられている。建築には地域の材が使われており、全体に装飾は排除され、華美を排した佇まいに高い精神性が表れており、簡素にして品格のある和の空間である。石州がこだわって造った重要文化財の手水鉢やつくばいも趣を添えている。



茨木



書院玄関の前



書院入



床の間



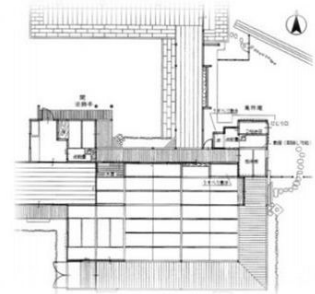
女の字(めのじ)



独座(どくざ)

【書院】

寺院でありながら、この書院が中心的建物。茅葺きの農家風外観である書院は、格式の高い荘厳な書院とは明らかに異なる思想が表れている。



【茶室 閑】

書院入り口の左手にある、三畳の茶室。席中は少し暗い。踊り口はなく、書院の北側廊下からの貴人口より入る。



【茶室 高林庵】

書院北東隅のある二畳台目の茶室。石州の代表的な席で、手前座の奥に床の間がある亭主床や二畳台目の隣に二畳の控えの間を設けている。



建物名称	臨濟宗大徳寺派 慈光院
建築年	1663年(寛文3年)
構造・様式	木造1階建て・書院作り・
所在地	大和郡山市小泉町865番地
電話	0743-53-3004
H P	http://www.1.kcn.ne.jp/~jikoin
開館時間	午前9時～午後5時 (年中無休)
アクセス	JR小泉駅または近鉄郡山駅バス片桐西小学校下車
備考	書院・高林庵・閑茶室; 国指定重要文化財 庭園; 史跡及び名勝指定

奈良学園セミナーハウス 志賀直哉旧居

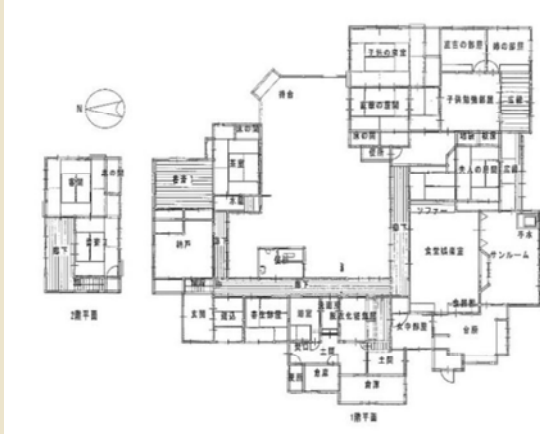
奈良県奈良市

ならがくえんせみなーはうす しかなおやきゆうぎよ



見どころ

建物は、昭和初期の文人宅に相応しく、上質で落ち着いたものがあるものである。全体構成は、数寄屋造りを基調とし各所に近代的な洋風意匠を加えるが、各要素は破綻なく見事に調和している。志賀直哉は、日記や手紙の中で、住宅に対する考え方を明確にしており、自身を表現する方法のひとつとしてこの建物があった。北棟は、書斎、茶室といった内証的な場、「高畑サロン」と呼ばれ直哉を慕う多くの文人画人が集ったサンルーム、食堂は公の場とした。一方、子供部屋を中心に構成された南東棟は、配置、窓の取り方など随所に家族の絆を大切にされた直哉の思想が伺える。



志賀直哉旧居は、直哉自ら構想し、京都の数寄屋大工の下島松之助が昭和4(1929)年に竣工させた住宅である。直哉が昭和13(1938)年に転居した後は個人に売却され、昭和22(1947)年から26(1951)年まで米軍に接収された。返還後は、厚生年金保養施設として利用されていたが、昭和50(1975)年に老朽化のため建替えが計画された。その時、近隣住民を中心として保護運動が展開され、昭和53(1978)年に奈良学園がセミナーハウスとして買収した。平成21(2009)年には、建築当時の姿に復元修理され、平成28(2016)年、奈良県指定有形文化財となった。

【茶室】

6畳広間の茶室。床柱は、桧の風倒木。床框も桧である。床の間前は杉目透かしの平天井、点前畳 上部は蒲の落天井とし、道庫がある。東側のくぐり戸を通り、待合のある茶庭から入る。貴人口のみで躡り口はない。

【サンルーム】

食堂から1段下がった床は、瓦製の四半敷きとし、井戸を模した手水や躡り口に見立てた板戸を設けている。天井は張らずに架構の丸太を見せ、葦を煤竹と小丸太で交互に押さえた数寄屋の意匠である。棟際には採光窓も開けられている。

【食堂】

床は松板張り、東側にソファを西側には台所と両面から使えるハッチのある食器棚を造り付け、漆喰塗り折上げ天井の洋間であるが、建具は障子を使い、赤松の半丸太を廻している。

【2階客間】

座敷飾りを備えた8畳の客間。床柱は直哉の好んだ赤松。床框は、桧の磨き丸太で、天端の太鼓落とし部分を漆塗りで仕上げている。鉤の手に繋がる窓は、腰を低く抑え、2箇所窓を開け放つと、若草山を借景に北側の池庭を望むことができる。



サンルームの採光窓



クヌギ丸太の門屋棟木



食堂の皮張りソファ



サンルームの手水

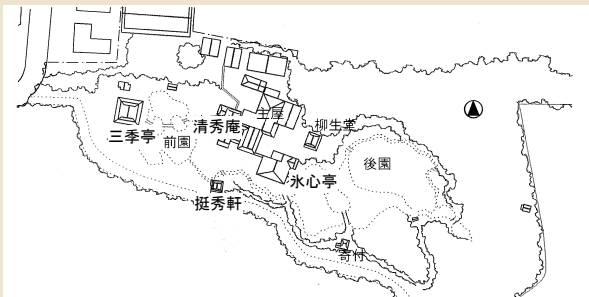
建物名称	志賀直哉旧居
建築年	昭和4年(1929年)
構造・様式	木造2階建て・数寄屋和洋折衷様式
所在地	奈良市高畑町1237-2
電話	0742-26-6490
H P	http://www.naragakuen.jp/sgnoy/
開館時間	午前9:30～午後5:30(冬季 午後4:30)休館：年末年始
アクセス	JR・近鉄奈良駅から市内循環バス「破石町」下車徒歩5分
備考	奈良県指定有形文化財 入館料：要



【三秀亭】茅葺の屋根構造に江戸時代初期の形式、内部には江戸時代前期と明治時代の好みが多様に詰め込まれている。

見どころ

依水園の建物群は、近代数寄者の茶の湯とは一線を画した、裏千家12世又妙斎の指導により、侘茶に忠実な茶道を追求された結果出来たものである。その配置は、借景として庭園を最大に受け取れる位置に設けられている。明治時代の古社寺修理の開始に伴って得られた古材の転用が見られるのも面白い。



清秀庵の意匠



天井:新薬師寺の古材



引手:つぼつぼ

氷心亭の意匠



欄間:三山(御蓋、高圓、若草山)



欄間:櫛型(寒雲亭の写し)



濡縁:新薬師寺の柱を転用



広間畳廊下からの眺望

依水園は、西側の江戸時代 延宝年間(1670年代)に作られた「前園」、東側の明治後期に作られた「後園」の二つの庭園と「寧楽美術館」からなる。「前園」は、奈良晒の幕府御用達商人であった清須美道清の別邸として建てられ、茶室「三秀亭」と「挺秀軒」が現存している。明治中期に同業者、関藤右衛門の手に渡り、その長男の藤次郎が、明治32年からほぼ10年をかけ建屋や庭園の修復整備を行い、茶室を配した「清秀庵」「氷心亭」などの主屋等の建物と、池泉回遊式借景庭園である「後園」を増築した。昭和14年に神戸の海運業者中村準策が取得し、昭和20年から28年の米軍の接収を経た後、一般公開された。昭和44年に寧楽美術館が建築され、戦災を免れた約2000点の美術品を収蔵している。依水園は、昭和50年、国の名勝庭園に指定された。



【挺秀軒】

延宝年間 接待所として建てられたものを明治に「清秀庵」の待合にも使えるよう、縁、雪隠、腰掛が設けられた。「清秀庵」に続く路地に「編笠門」が建てられている。



【清秀庵】

四畳半本勝手の茶室と鞘の間、六畳台目からなる。檜皮葺き、袖壁で変化をつけ、外観を軽やかに見せている。内部は裏千家「又隠」を意識した造りであるが、網代天井を少し高めにしたり、躰口と貴人口を併設するなど、又妙斎の配慮が感じられる。



【氷心亭】

依水園の主座敷にあたる茶室で、屋根はキングポストトラスを用いた兜造り風の茅葺き。十三畳の広間と五畳半の小間が後園の池に面しており、背面側に、九畳の次の間、四畳分の水屋が置かれている。



【氷心亭 十三畳の広間】

天井は「寒雲亭」を意識した竿縁の平天井(新薬師寺の古材)、掛けこみ天井、船底天井を組み合わせている。床の間は巾7尺8寸の柵の踏込み床、赤松皮付の床柱を持つ。付書院欄間は屋久杉に桐紋の意匠が施されている。

建物名称	名勝 依水園
建築年	前園 延宝年間(1670年代) 後園 明治32年(1899年)
構造・様式	木造1階建て
所在地	奈良市水門町74
電話	0742-25-0781
H P	http://www.isuien.or.jp
開園時間	午前9:30~午後4:30(入園は 午後4時迄)
	休園:毎火曜日(令和1年10.11月は無休)、年末年始
アクセス	近鉄奈良駅から徒歩15分(東大寺西隣)
備考	国指定 名勝庭園 入館料:要

奈良町宿 紀寺の家

奈良県奈良市

ならまちやど きでらのいえ



前庭のある町家

古くから栄える奈良町で、約100年前に借家として建てられた5つの町家。時代の移り変わりとともに界隈の町家が次々と壊されていく中、5つの町家を快適で魅力的な住まいとして再生し、「今の町家暮らし」が体感できる宿として活用されている。



町家の表構え

見どころ

＜土間の活用＞「通り庭の町家」は、玄関のくぐり戸から中に入ると天井が高く開放的な通り庭がある。昔ながらの土間形態のまま、くつろぎの空間として利用されている。

「前庭の町家」や「角屋の町家」では、ベッドが設えられている。和の要素の中に洋の要素が取り込まれており、空間の変化が楽しめる。



通り庭の土間空間

5つの町家（「縁側の町家」「前庭の町家」「通り庭の町家」「角屋の町家」「三間取りの町家」）は、それぞれに特徴的な間取りを持ち、町家暮らしの文化や歴史を感じる事が出来る。

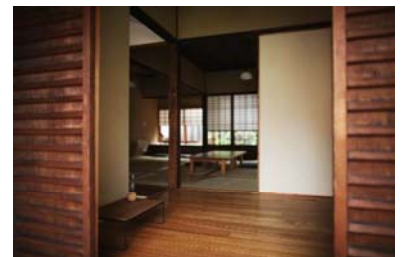
1棟の戸建てと2棟の長屋建てで構成されており、路地も含めた建築群として活用されているところも魅力である。

町家の佇まいはそのままに現代の暮らしに沿うように手を入れて住み継ぐことを改修の主旨とされており、暮らしに寄り添う町家の魅力そのものが感じられる。改修は、職人の手による伝統的技法により、昔ながらの素材「木」「土」「石」「紙」が使われている。古材や古瓦も多く取り入れられている。

新たにつくられた空間や現代的な設えも見事に調和しており、新しさの中にも建物本来の持つ伝統と品位が保たれている。

また、寒さの解消のための断熱改修及び、伝統構法の耐震改修も施されている。

宿のフロントでは「町家・古民家暮らし準備室」を開設されており古い建物を改修して住まわりたい方への相談窓口としても活用されている。



小屋組を表した空間



季節を感じる中庭

＜庭との関係＞それぞれの町家には小さな庭がある。静かな光が入り風が通り抜け、鳥の音が聞こえる。町家暮らしの豊かさが感じられる。

＜木部の経年変化＞

新たに改修された木部には、濃色の着色は施されていない。建物に手を入れながら更新されている様子が伺え、木部の経年変化が自然な街並みをつくっている。



高い設計技術により改修されたそれぞれの町家は、現代の暮らしにも通じる和の魅力を十分に味わうことができる。素材の使い方等の改修の手法も含め、細部にわたり見どころが多い。

建物名称	奈良町宿 紀寺の家（宿泊施設）
建築年	大正13年（2011年改修 改修設計：藤岡建築研究室）
構造・様式	木造平屋建て 戸建て1棟・長屋建て2棟
所在地	奈良市紀寺町779
電話	0742-25-5500
H P	http://www.machiyado.com/
開館時間	（宿泊予約はホームページ参照）
アクセス	JR奈良駅・近鉄奈良駅より「天理駅」「下山」「窪之庄」行きのバスに乗り、「紀寺町（市立奈良病院前）」下車。徒歩3分。
備考	登録有形文化財（戸建て1棟のみ）

堀家住宅 賀名生旧皇居KANAU

奈良県五條市

ほりけじゆうたく あのをきゆうこうきよ かなう



足利尊氏によって京の都を追われた後醍醐天皇が吉野へ向かう途中に立ち寄った堀孫太郎信増の邸宅である。その後、後村上天皇、長慶天皇、後亀山天皇の南朝三帝の行宮であった。当時の面影をとどめる屋敷で全国でも最古に属する民家で、1979年 国の重要文化財に指定されている。桁行方向17.6m、張間方向13.8m、入母屋茅葺き屋根で北面及び西面に棧瓦葺の庇が取りついている。平面は整形六間取り、柱間寸法は広く、内法高が低い特色がある。室町時代後期の建築時は2階建てであったが、江戸、明治時代の幾度かの変遷により現状となった。現在、第29代当主が継承、カフェレストランを営んでいる。

【土間上部の屋根裏の見上げ】
竹のすのこ天井が開いた部分から
小屋裏の架構が覗ける。



見どころ



西吉野村の北部・和田の町並みは丹生川の渓谷に沿うようにあり、堀家住宅は、その丹生川の清流に臨むようにひっそりとある。川に張り出したデッキスペースで川の音をBGMに時間が過ぎるのを忘れて南朝の栄華に想いを馳せるのも素敵である。また、焼失してしまっただが、現存している建物の前、16世紀前半に「鹿苑寺金閣」に似た建物が建っていたと、2018年発掘調査の結果が発表されている。



【土間】右に六間の和室が連なっている。
左がミソベヤ、奥には七つの掛け口を持つ竈が据えられている。



【ゲンカンノマ】正式な玄関で、登り框、式台があり、天井は根太天井で、武具掛けを備える。



【オクノマ】床の間は框床で、薄縁敷き、床柱は赤松の皮付き。出書院の天井と小脇は杉の研ぎ出し板。落とし掛や違い棚、地袋、地板は樺が使われている。



【表門】大正13年建築の重厚な冠木門で、2000年 奈良県の指定文化財に選定された。



【ナカノマ】長持のテーブル。堀家には、南北朝時代から伝えられた調度品が多く残っている。



【天井】当初建物が2階建てであった名残の階段跡。



茅葺屋根の上に乗るカラス脅し。竹で編まれた格子が美しい。



倒幕の志士 天誅組吉村貞太郎の筆による「賀名生皇居」の扁額が掲げられている。

建物名称	堀家住宅（賀名生旧皇居KANAU） レストラン・宿泊施設
建築年	室町時代後期（江戸、明治時代改修）
構造・様式	木造1階建て（当初2階建て）
所在地	奈良県五條市西吉野町賀名生1番
電話	0747-32-0080
H P	https://kanau1318.jp
営業時間	11:00~16:00 16:00~21:00（予約要）
アクセス	車：京奈和自動車道五條IC本陣交差点から168号線十津川方面約20分 見学はレストラン利用者のみ
備考	



「うぶすなの郷TOMIMOTO」は陶芸家、人間国宝、文化勲章受章者である富本憲吉（1886年-1963年）の生家で、富本の没後に同郷の友人である辻本勇が生家や作品等を譲り受け整備し開館した富本憲吉記念館（1974年-2014年）であったが、2017年より「芸術家富本の創造空間を感じる宿」「寛げる宿」としてレストラン・陶芸体験工房・ギャラリーを備えた宿泊施設に生まれ変わった。場所は奈良県生駒郡安堵町にあり田園地帯が広がる大和盆地中央部に位置し、町西側に富雄川、南側には大和川が流れる。南北に長い敷地の周りが壕で囲われた環壕屋敷であった。敷地周辺に古くは聖徳太子の時代から続く極楽寺など神社仏閣が多く点在する。また富本憲吉記念館開館以降に安堵町歴史民俗資料館や安堵町文化観光館等もできており、安堵町の文化歴史の情報発信の拠点としての役割も担っている。

見どころ



【五風十雨】主屋

1974年に富本憲吉記念館開館時に建築された。京都の陶芸家上田恒次が設計監修を行った。主屋は木造ツシ二階建て平入、梁間3間、桁行6間の切妻形式の瓦葺屋根で、下屋が四面にかけられている。平入面は丸太の出桁で柱を建て軒を深く出している。外壁は腰壁部分は下見板張り弁柄塗、上部は漆喰塗、柱梁などの木部は弁柄塗仕上げ。越屋根、虫籠窓、出格子などが大和の民家様式を表している。



【日新】富本憲吉が愛した数寄屋造りの離れ。江戸後期（安政年間）建築。8畳の和室は床の間床脇の設え。床脇天袋は憲吉のデッサン「エビヅル図」を表装したもの。宿泊施設。



【竹林月夜】1974年に大阪の土蔵（1914年築）を移築。憲吉が好んで図案化した「竹林月夜」にちなんで本施設の開業時に竹林を作庭。春には枝垂れ桜を楽しむことができる。宿泊施設。



吹き抜けの二間



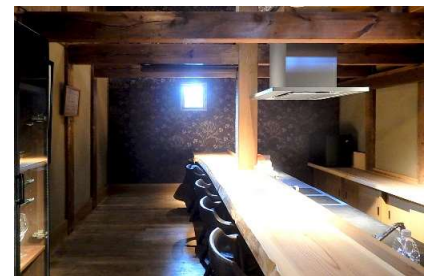
北側の日本庭園

内部は記念館時代には展示室などがあり畳敷きであった。現在はレストランとして使用され、平入の玄関は通り土間で北側の4間は板敷としている。土間脇の二間は切妻屋根の架構を見せる吹き抜けになっている。北側の二間は梁上に根太天井が張られており、北側の日本庭園を眺めながら食事を楽しむことができる。床の間などの設えはそのまま使われ、地板などに樺が多く使われている。富本家と代々ゆかりの深い法隆寺の大野玄妙前管長の書「五風十雨」が飾られている。



【長屋門】

江戸後期（安政年間）建築。憲吉が暮らしていた当時の写真と比べても変わらない外観を保っている。



【アーティチョーク】江戸後期（安政年間）建築の土蔵。宿泊者限定のレストランバー。裏庭はイングリッシュガーデン。

建物名称	うぶすなの郷TOMIMOTO(宿泊施設・レストラン)
建築年	江戸時代(安永年間)・1974年
構造・様式	木造一部二階建て 瓦葺き
所在地	奈良県生駒郡安堵町東安堵町1422番
電話	0743-56-3855
H P	https://and-tomimoto.jp/about/index.html
営業時間	レストラン(屋食) 午前11:00~12:30/13:00~14:30 (夕食) 午後 5:00~、 宿泊 午後3:00~
定休日	火曜日
アクセス	J R法隆寺駅からバス8分東安堵下車徒歩5分 西名阪自動車道法隆寺ICより6分
備考	完全予約制(当日の3日前まで)

琴ノ浦温山荘園 浜座敷

和歌山県海南市

ことのうらおんざんそうえん はまざしき

【琴ノ浦温山荘園概要】

琴ノ浦温山荘園は、新田帯革製造所の創業者である新田長次郎翁が、55歳の頃に体調を崩し、「健康回復には己の欲すること、好む所を趣味として行うのが第一の養生法なり」と助言され、造園を趣味にしていたので、別荘の造営を始めようと決心し、大正初期から昭和にかけて造園されたものである。黒江湾から海水を引き、その潮の干満により水位が変動し、池泉景観が変化する「潮入式池泉回遊庭園」の中には、浜座敷、主屋（本館）、茶室（鏡花庵）などが庭園と一体的に建てられている。庭園は国指定の名勝に、建造物は重要文化財に指定されている。また、平成29年には日本遺産にも認定された。



主屋（本館）



茶室（鏡花庵）



浜座敷

見どころ

浜座敷に入ると、寄り付き6畳間の北側に、大きな花頭窓が壁一面に広がっているのが印象的である。外部から見ると、雨戸の戸袋は設けず、雨戸の中だけ敷居と鴨居を横に伸ばし、そこに雨戸が納まるスッキリとした意匠となっている。寄り付き6畳間と10畳間の境には、一連の金と銀の雲の文様の襖があり、竹の輪とコウモリの引手が付いている。また、縁のガラス障子は、雨戸のようにすべて引き込む事ができるので、外部と一体化した開放的な空間を楽しむ事ができる。天下の景色を独り占めすることを欲せず、広く一般に公開した長次郎翁の心意気と、庭園と一体的に建築された建物の調和と、細部まで気を配った意匠を楽しんで見て欲しい。

【浜座敷】

海を眺望する敷地の南端に、園内で最初に建設されたのが「浜座敷」だった。崖上に建つ懸造風の離れ座敷で、入母屋と寄棟屋根をT字形に合わせた「撞木造り（しゅもくづくり）」と呼ばれる形式の屋根は、東大寺の三月堂をモチーフにしたと言われており、古代風の意匠の鬼瓦が据えられている。本瓦葺きの重厚な屋根をもつ一方で、屋根勾配は緩く、垂木は吹寄せに配置され、軽妙な構成になっている。内部は、玄関奥に寄り付き6畳間があり、10畳間へと続き、外側に矩手に廻した開放的な縁が広がっている。縁先の高欄は、3本の横連子に三組の束を立てた特徴的な意匠で、内外観を整えるアクセントとなっている。近代和風建築らしく小屋組にトラスを用いたり、天井板には当時最新の建築資材であった合板を使用するなど、新しい技術を取り入れているところが魅力ある和の空間の構成要素になっている。



寄り付き6畳間
内観(左)と花頭窓(上)



古代風の意匠の鬼瓦



東縁 天井見上げ



寄り付き6畳間
襖(左)と引手(上)



10畳間 南西を見る



東縁 北東を見る



10畳間
襖(左)と引手(上)

建物名称	琴ノ浦温山荘園 浜座敷
建築年	1913年（大正2年）
構造・様式	木造平屋建て・屋根入母屋造及び寄棟造 本瓦葺
所在地	和歌山県海南市船尾370
電話	073-482-0201
H P	http://www.onzanso.or.jp
開館時間	9：00～17：00（月曜、12月1日～2月末日休園）
アクセス	JR海南駅より和歌山方面バス10分「琴の浦」下車
備考	庭園：国指定名勝、建造物：重要文化財、日本遺産



【山崎邸概要】

- ◇主屋 木造二階建 屋根入母屋造 棧瓦葺(床面積…675㎡)
棟上 大正6年5月30日
- ◇北側土蔵 土蔵造二階建 屋根寄棟造 棧瓦葺(床面積…71㎡)
棟上 大正7年
- ◇南側土蔵 土蔵造二階建 屋根切妻造 棧瓦葺(床面積…23㎡)
- ◇表門 間口4.28m



見どころ

この建物は、かつて綿ネル事業で財を成した山崎家の豊かさを反映し、中庭に面した廊下の先にある質の高い和洋折衷の階段室や豪華絢爛な奥の大広間を筆頭に趣向を凝らした意匠が数多く散りばめられた邸宅となっている。

敷地の東側に位置し折上吹寄格天井と金箔で雲が表現された壁面で構成された大広間は、外観の厳肅さから想像しがたいほどきらびやかで、足を踏み入れるのも気が引けるほどである。

また、1階と2階に傘天井を持つ間があり、1階は和洋折衷の客間、2階は伝統的な和室となっており、各室の意匠や趣の違いは必見である。

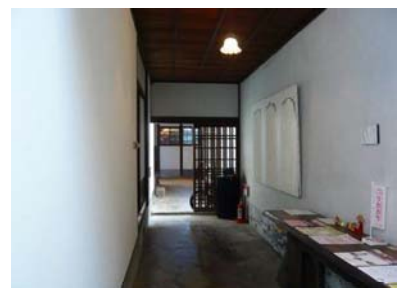


敷地は、南北に長い長方形である。主屋は、口の字型に中庭を挟み、東側に大広間を伸ばした平面形となっている。1階玄関より北進すると、両側に広縁を備えた次の間と床間・違棚を備えた書院造の座敷がある。東に折れると県内でも数少ない極めて豪華な大広間がある。2階は、幅広い堅木が使用された特徴ある天井を有した座敷等、趣向を凝らした和室空間が広がっている。



内部は、伝統的な格式を現す意匠を備える一方、形式にとられない質の高い意匠が随所に見られ、加えて洋風の意匠も導入するなど近代建築としての特色を備える。また良材もふんだんに使用されているのも見逃せない点である。主屋内部は改造が少なく竣工時の姿をよく遺し、敷地全体においても主屋の他、土蔵、門、土塀など屋敷構えがよく残存している。

南西に位置する、かつての勝手口は、現在営業されているcaféのエントランスとして利用されており、当時の山崎邸の生活の場であったであろう空間を肌を感じながら、気軽に食事を楽しむことができるのも、この建物の魅力の1つである。



価値ある近代和風建築としての特色を持つ山崎邸は、様々なイベントやcaféとして利用する事により、一層身近に和の空間を感じられる場所となっている。

建物名称	山崎邸
建築年	1918年(大正7年)
構造・様式	木造二階建・屋根入母屋造 棧瓦葺
所在地	和歌山県紀の川市粉河853
電話	0736-60-8233
H P	https://hajime-cafe.jimdo.com
開館時間	café 毎週 木～土曜 11:00～15:00
アクセス	JR和歌山線粉河駅 徒歩1分
備考	上記時間外は、お問い合わせ下さい。



庫裡

蓮華定院は空海が修禪の道場として開いた日本仏教における聖地のひとつである高野山にあり建久年間（1190年頃）に鎌倉幕府のあつい帰依を受けていた行勝（ぎょうしょう）上人により念仏院として開創されたのが始まりである。高野山では天保の頃に800を超え存在していた寺院も度重なる大火や明治の廃仏毀釈により現在は117カ寺となるがその約半数は宿坊寺院を兼ねている。江戸時代、幕府が諸国大名に高野山に墓を建てるよう推奨し多くの寺院はその菩提寺・所縁坊としての役を担い諸国大名との壇縁が結ばれた。また参詣者を受け容れる施設として高野山では宿坊が発展してきたが、近年まで出身県によって利用する宿坊も決められていたという。蓮華定院は鎌倉時代よりこの場所にあり、江戸期以降は幾度の火災にも免れ、現在にその姿を遺した宿坊寺院である。信州真田家との所縁が深く、蓮華定院内の至るところに家紋の六文銭があしらわれ『真田坊』とも呼ばれている。



見どころ

宿坊という性質上、寺内見学は宿泊者に限るが、真田昌幸・幸村親子が寝起きた「上段の間」と「上段次の間」に設えられた欄間は中国風で重厚さが際立つ。鴨居は漆塗りの付鴨居で付樋端（つけひばた）と呼ばれふたの間を一体として使用するという意味を持つ。また「土室」の差し鴨居が一尺六寸を超える造りは高野山の寺院に共通する特徴の一つであるが、その大きさの必要性は謎である。昭和初期に建てられた宿坊には現在では入手不可能な高品位の材が数多く使われており、それらを探してみるのも面白い。宿泊者は本堂にて行われる夕方の瞑想【阿息観／あそくかん】や早朝のお勤め【朝勤行】に参加する事が出来る。特別な和空間での非日常的な体験を是非お薦めしたい。



山門を潜ると正面をずらして玄関が配された檜皮葺の庫裡が見える。庫裡には「持仏間」を中心にしてそれを囲む形で「上段の間」「上段次の間」「角の間」「稚児の間」「大広間」「土室」「茶の間」「会所」といった座敷が配されており、それぞれの襖を取り払うと大空間が生まれる高野山寺院の特徴を表す造りとなっている。庫裡の左手には江戸期に建てられた本堂と護摩堂があり、それらの建物は火災から御本尊をお守りする為に四方の壁に加え屋根の下と床下も土造りの『六方蔵』となっている。宿坊は庫裡から護摩堂の横を抜け、幾つの中庭を囲んだ形で変形T字型に配されており、傾斜地を利用して建てられたそれらの棟は互いの視線をずらす工夫がされている。正面からはその形を窺う事は出来ないが、どの部屋に滞在しても部屋から美しい庭を愛でる事が出来る。江戸時代の襖絵がそのまま使用されている客室も数多く有り、蓮華定院の懐の深さを知る事が出来る。



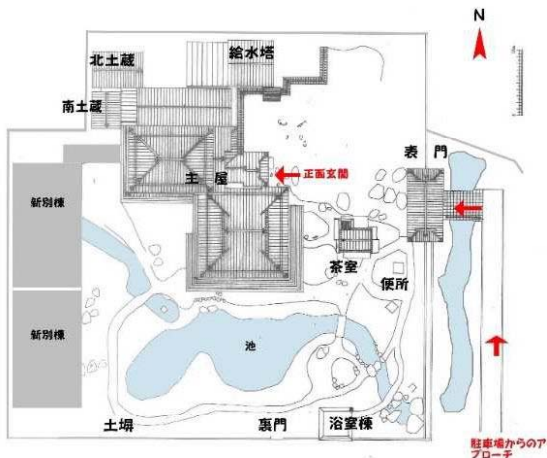
庫裡 大広間から持仏間を望む

建物名称	蓮華定院
建築年	本堂・庫裡 / 万延年間（1860年頃）
構造・様式	木造
所在地	和歌山県伊都郡高野町高野山700
電話	0736-56-2233
H P	なし
開館時間	IN 15:00~17:00 OUT 9:00
アクセス	南海高野山ケーブル 高野山駅 下車 路線バスにて2駅目 [一心口]下車 正面
備考	見学は檀家及び宿泊者のみ

旧松井家別邸（がんこ六三園）

和歌山県和歌山市

きゅうまついけべっせい（がんころくさんえん）



- 表門 木造平屋建 長屋門
- 主屋 木造平屋建（一部2階）
- 北土蔵 土蔵造2階建
- 南土蔵 土蔵造2階建
- 茶室 木造平屋建
- 給水塔 煉瓦造2階建
- 浴室棟 煉瓦造平屋建
- 便所 木造平屋建
- 裏門 鉄筋コンクリート造
- 土堀 土堀

見どころ

稀代の頭脳と鮮やかな駆け引きによって奔放な相場を繰り広げ、「世直し大明神」「北浜の太閤はん」の異名で呼ばれた松井氏が、亡くなるまでの約5年を過ごした別邸である。

道路からのアプローチ、表門、石畳みの広い玄関アプローチを通り、正面玄関に入る。玄関には、大きな青石の踏み石、屋久杉を使った舟底天井、座敷には優雅な意匠の欄間や、長押の釘隠、また応接室には大正ロマンの格子窓や内装など、随所にこだわりが感じられる。開口部をダイナミックにとることで、庭園を存分に鑑賞できるよう考えられている。



長屋門形式の表門



座敷棟 間越欄間



釘隠



応接室の格子窓

外構では、大阪の難波橋と同じライオン像が玄関先に置かれ、回遊式庭園には、各地より取り寄せた石材の石塔や石灯籠が、豪快に配置されている。



ライオン像



石塔



座敷棟から見た庭園

給水塔、浴室、便所、土蔵、茶室、土堀、裏門と、それぞれの用途に合った構造で周到に建てられており、興味深い。現オーナーにより、各座敷や廊下に適した調度品や季節のものが飾られており、食事客を華やかに出迎えてくれる。

【旧松井家別邸（がんこ六三園の概要）】

和歌山県橋本市出身で、大正時代に大阪・堂島の米穀取引所で活躍した伝説の相場師、松井伊助（1865-1931年）が63歳の祝いに和歌山市に建てた別荘。

戦後は一時米軍に接收されたが、1952年、当時の和歌山銀行のオーナー尾藤家を買収され、長く料亭として利用された。2005年、がんこ六三園として運営を引き継がれ、現在に至る。

約2,000坪の広大な敷地の南側に回遊式の庭園が築かれ、庭園に面して中央に（2階棟・玄関棟・座敷棟）からなる主屋が建てられ、その北西に土蔵が2棟、建てられている。これら主屋、土蔵2棟の他、給水塔、表門、茶室、便所、浴室、裏門、土堀の計10件が、国の登録有形文化財として2012年に登録されている。

【主屋：大正9年（1920年）】



2階棟 外観



2階棟



座敷棟

2階からの眺望。細い格子で開放的となっている。

三面手漉きガラスが連なり、広縁と座敷の間の建具が外され庭園を180度眺めることができる。



応接室

和洋折衷の応接室。腰壁と天井、壁と椅子が同じ模様の布で張られ、家具、大理石の暖炉、銅製の鏡、照明、内装が調和している。

建物名称	旧松井家別邸（がんこ六三園）
建築年	1920年（大正9年）（主屋）
構造・様式	木造平屋一部二階建、瓦葺一部銅板葺（主屋）
所在地	和歌山県和歌山市堀止西1-3-22
電話	073-422-7163
H P	https://www.gankofood.co.jp/shop/detail/ya-rokusanen/
開店時間	店舗 月～金 11:00～15:30 / 17:00～22:00 土・日・祝 11:00～22:00
アクセス	JR阪和線 和歌山駅 西口車20分 / 南海本線 和歌山市駅 車20分
備考	送迎バス有り（要予約）

旧和歌山県議会議事堂

きゅうわかやまけんぎかいぎじどう

和歌山県岩出市



旧和歌山県議会議事堂は明治31年（1898年）に和歌山城北東の和歌山市一番丁に建設された。木造二階建て一部平屋、建築面積1,239.16㎡で正面より車寄を備えた本館部、中央に議場部、背面を控室部とする工型の構成となっている。規模の大きな木造建築で、議場のみならず公会堂としても用いられた。約40年間の使用の後、昭和16年に保証責任和歌山県信用購買販売利用組合連合会（現JAグループ和歌山）に売却され事務所として市内美園町に移設、昭和37年に根来寺境内に移設され、「一乗閣」と名付けられ大客殿や宿泊に使われた。平成24-27年の修復工事によって、現在地に移築され建築当時の姿に修復された。建物の公開のみではなく、イベントや展示場として積極的に活用できるようEV棟などを付設し、免震構造を施し、復元されている。

見どころ

【車寄】

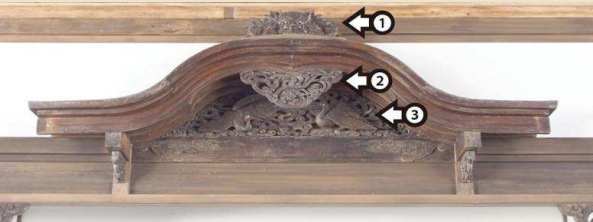
正面車寄には華麗な彫刻が施されている。「兎の毛通し」は鳳凰、「笈形」は波、「臺股」は雲をモチーフとしている。床の間の彫刻と合わせて、彫工「大窪嘉輔」の手によるものとされる。



※

【床の間】

議場には床の間が付いている。上部には唐破風が設けられ、鬼板(①)をはじめ、亀(②)や鶴(③)をあしらった彫刻で飾られている。床の間は演者の背景に位置し、当時、日の丸を掲げたり、盆栽を置いたりするのに使われた。



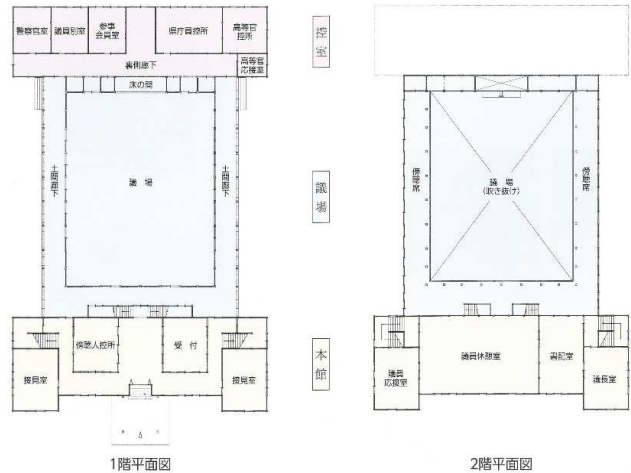
※

【議場の天井】

天井は中央部を折上格天井、周囲を鏡天井とした構成である。折上格天井天井は、杉の杢目板で、一つの格間を一枚張とした木取りで、前後左右の杢目の向きを変え、市松模様になっている。



※写真は和歌山県提供



外壁は和風意匠で統一されているが、本館部と議場部の屋根は西洋式のトラス組を採用している。近代の技術が効率的に採用されて柱のない大空間を実現し和魂洋才の建物となっている。



※

建物名称	旧和歌山県議会議事堂
建築年	明治31年(1898年)
構造・様式	木造二階建て 瓦葺屋根 和風意匠
所在地	和歌山県岩出市根来2347-22
電話	0736-61-1160
H P	http://www.negororekishinooka.jp
開館時間	午前9時～午後5時(毎週火曜日・年末年始 休館)
アクセス	JR和歌山線岩出駅下車 樽井駅行バス岩出図書館下車 徒歩10分
備考	重要文化財(平成29年7月31日指定)